

Title	学校内における“性”を対話するサードプレイスの空間づくり： ピアエデュケーターによる「セクソロジールーム」の実践から
Sub Title	Approaches to creating a third place for dialogue about sexuality within schools : practical examples of “sexology room” run by peer educators
Author	孫, ジャル(Son, Jaru) 佐藤, 千尋(Satō, Chihiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科
Publication year	2025
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2025年度メディアデザイン学 第1172号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40001001-00002025-1172

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

修士論文 2025 年度

学校内における“性”を対話する
サードプレイスの空間づくり

—ピアエデュケーターによる「セクソロジールーム」の実践から—



慶應義塾大学
大学院メディアデザイン研究科

孫 ジャル

本論文は慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科に
修士(メディアデザイン学)授与の要件として提出した修士論文である。

孫 ジャル

研究指導コミッティ：

佐藤 千尋 准教授 (主指導教員)

大川 恵子 教授 (副指導教員)

論文審査委員会：

佐藤 千尋 准教授 (主査)

大川 恵子 教授 (副査)

武田 秀太郎 准教授 (副査)

修士論文 2025 年度

学校内における“性”を対話する サードプレイスの空間づくり

—ピアエデュケーターによる「セクソロジールーム」の実践から—

カテゴリ：デザイン

論文要旨

近年、欧米では包括的性教育が広がり、性や人間関係など幅広いテーマが教育に取り入れられ、世界的に性教育の重要性が認識されている。しかし、こと日本においてはやや状況が異なり、性教育後進国として知られており、中学校での性教育時間は年平均で約3時間(2017年時点)と非常に短く、人権教育の観点からも性教育の普及や充実が求められる中で、性教育に対する偏見や人材・時間などのリソース不足が性教育の普及を阻む主な原因として立ち塞がる中、多くの学校では政府による消極的な学習指導要領に添った内容を性教育として実施している。だがこうした状況は、教員と生徒の間に「実際の生活で役立てられるような内容が提供できない/学べない」という「性教育ギャップ」を生み、そうしたギャップが性教育に対する不満や無関心として、負のループにつながっている。

こうした現代日本が持つ課題に対し、本論では少ないリソースを用いて、授業ではカバーしきれない性教育の知識や実践を学ぶ機会を創出する場として「セクソロジールーム」を設計、提案する。セクソロジールームはサードプレイスなどの要素を取り入れ、授業とは異なる「性について対話できる雑談会」としてデザインされた空間であり、カフェやオンラインコミュニティのようにリラックスして自分らしくいられる場を作り、生徒らが個別に性に関する学びを気軽に模索できる環境を提供する。場の心理的安全性に関しては、ファシリテーターとしてピアエデュケーターの資質を持つ人材（ここでは研究者自身）が知識や実践方法の

共有、並びに空間の維持管理を担うことで、参加者の性に関する学びを損なうことのないよう、高い安全性を提供する。

本研究では、都内の高校に性教育を主軸とした雑談会「セクソロジールーム」を設置し、これが「性に関する対話を促す場所」として機能するか否か、オルデンバーグが提唱したサードプレイスの要素や Arao らの「セーフアースペース」の規範に基づいて検証する。またセクソロジールームでの筆者による参与観察及び生徒と教員によるフィードバックを通じて、授業とは異なる「個々のニーズに応える場」としてのセクソロジールームの価値、並びに性教育分野における有用性などを総合的に分析する。

キーワード：

ジェンダー, 性, ピアエデュケーター, サードプレイス, 包括的性教育

慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科

孫 ジャル

Abstract of Master's Thesis of Academic Year 2025

Approaches to Creating a Third Place for Dialogue about Sexuality within Schools

—Practical Examples of “Sexology Room” Run
by Peer Educators—

Category: Design

Summary

In recent years, comprehensive sex education has spread throughout Europe and the United States, with a wide range of topics such as sexuality and human relationships being incorporated into education, and the importance of sex education is now recognized worldwide. However, the situation in Japan is somewhat different, Japan is known as a country lagging behind in sex education, with an average of only about three hours of sex education per year in middle schools (as of 2017). Despite the need for the promotion and enhancement of sex education from a human rights perspective, prejudice against sex education and a lack of resources such as personnel and time stand as major obstacles to its widespread implementation. Many schools are currently conducting sex education in accordance with the government's passive curriculum guidelines.

However, this situation has created a “sexual education gap” between teachers and students, who feel that they are not being provided with or are unable to learn content that is useful in real life. This gap leads to dissatisfaction and indifference toward sexual education, creating a negative cycle.

In response to these issues facing modern Japan, this paper proposes the design of a “sexology room” as a place where students can learn about sexual education

that cannot be covered in class, using limited resources. The Sexology Room is designed as a space for casual conversations about sexuality, incorporating elements of a third place, and providing an environment where students can relax and be themselves, similar to a café or online community, and freely explore sexuality on their own. In terms of psychological safety, facilitators with peer educator qualifications (in this case, the researchers themselves) will share knowledge and practical methods and maintain the space to ensure a high level of safety so that participants' learning about sexuality is not compromised.

In this study, we set up a casual discussion room called “Sexology Room” focused on sex education at a high school in Tokyo and verified whether it functions as a “place that promotes dialogue about sexuality” based on the elements of the third place proposed by Oldenburg and the norms of “safe space” proposed by Arao et al. Additionally, through participant observation by the author and feedback from students and teachers in the Sexology Room, this study will comprehensively analyze the value of the Sexology Room as a space that addresses individual needs, distinct from traditional classroom settings, as well as its usefulness in the field of sex education.

Keywords:

gender,sex,peer educator,third place,comprehensive sex education

Keio University Graduate School of Media Design

Jaru Son

目次

第1章 序論	1
1.1. 研究背景	1
1.2. フィールド：K 高校とその課題	3
1.3. 本論文の目的と構成	4
第2章 関連研究	6
2.1. 日本における性教育の変遷と課題	6
2.1.1 性教育の歴史的背景と現状	6
2.1.2 性教育に対する生徒の受け止め方	7
2.2. 学生たちにとっての居場所：コミュニティとしての視点から	7
2.2.1 安全な対話を行う空間で必要なルールとは	8
2.3. ピアエデュケーターとの関わりがもたらす効果	9
2.4. 本研究の意義	10
第3章 デザイン	11
3.1. セクソロジールームとは	11
3.1.1 前提	11
3.1.2 デザインコンセプトと基本構成	13
3.1.3 本研究におけるピアエデュケーターの役割	16
3.2. デザインプロセス	17
3.2.1 民族誌調査から見えてくる学校の現状	17
3.2.2 “性の対話”のための仕組みづくり	19
3.2.3 グラウンドルールの策定	20
3.2.4 性教育ボランティア活動を通じた複数の教育現場の参与観察	20

3.2.5	K校での個人発表授業	21
3.2.6	事前アンケートから見る生徒のニーズと教員とのギャップ	22
3.3.	セクソロジールーム: プロトタイプ (2024 年度実施)	25
3.3.1	セクソロジールーム: プロトタイプの実施	26
3.3.2	プロトタイプから得た知見	27
3.4.	セクソロジールームの再設計	28
3.4.1	参加生徒のペルソナ像と調整	28
3.4.2	生徒への情報発信 (Q & A やフライヤー)	28
3.5.	セクソロジールーム: プチゼミ会 (2025 年度実施)	29
3.5.1	第一回目の実施	29
3.5.2	第一回目の実施	32
3.5.3	第二・三回目の実施	34
3.6.	セクソロジールーム: プチ相談会 (2025 年度実施)	34
3.6.1	第一回目の実施	34
3.6.2	第二・三回目の実施	35
3.6.3	第四回目の実施	35
第 4 章	価値検証	37
4.1.	検証方法	37
4.2.	空間機能性評価	37
4.2.1	参加生徒からのフィードバック	38
4.2.2	サードプレイスとしての機能性評価	38
4.3.	ブレイブスペースとしての機能性評価	43
4.4.	ピアエデュケーターの立ち位置と役割	45
4.5.	教育現場におけるセクソロジールームの有用性	46
4.5.1	参加生徒の評価及び参与観察に基づく評価	46
4.5.2	教員のインタビューに基づく有用性の評価	47
4.6.	セクソロジールームの成立要件	50

第5章 結論	52
5.1. セクソロジールームの意義	52
5.2. セクソロジールームの持続可能性、並びに他校での汎用可能性 . .	53
5.2.1 K校における持続可能性	54
5.2.2 その他の学校現場における実施可能性	55
5.3. 今後の課題	57
5.3.1 ピアエデュケーターの人材確保	57
5.3.2 ピアエデュケーターの精神衛生に関する注意喚起	58
5.4. 総括	59
5.5. 展望	59
5.6. おわりに	60
謝辞	62
参考文献	63
付録	65
付録 A 付録 A：事前アンケートの結果（自由記述を含む）	66
付録 B 付録 B：事前アンケートの質問項目	77
付録 C 付録 C：参加後アンケート質問項目	81
付録 D 付録 D：その他配布物	84

図 目 次

3.1	ステークホルダーとセクソロジールームの関係図	14
3.2	セクソロジールームのデザイン構造	15
3.3	会の様子 a	26
3.4	会の様子 b	27
3.5	会で並べる様々な本、中には借りていく生徒も	29
3.6	当日の告知	30
3.7	配布、配信したチラシ	31
3.8	Q & A(抜粋)	31
3.9	会の流れ	32
3.10	アイスブレイクで用いるセキララカード	33
3.11	第四回の会の様子	36
4.1	会の雰囲気に関する参加者の回答（プチゼミ会）	39
4.2	会の雰囲気に関する参加者の回答（プチ相談会）	39
4.3	セクソロジールームの成立要件の図式	50
D.1	配布したグラウンドルール	85

目 次

4.1	プチゼミ会での会の雰囲気についての回答選択理由	40
4.2	プチ相談会での会の雰囲気についての回答選択理由	40

第 1 章 序

論

1.1. 研究背景

近年、性教育の取り組みとして、欧米諸国を中心に包括的性教育という教育が実践されている。包括的性教育では生殖に関する内容やセクシュアリティから人間関係まで、全ての人の性や生活に関わる重要な事柄を取り扱う。世界性の健康学会 (WAS) の「性の権利宣言」では、「人は誰も、教育を受ける権利および包括的な性教育を受ける権利を有する。」と明記されており、日本が1985年に批准した女性差別撤廃条約でも包括的性教育の導入が盛り込まれている。しかしながら、実際にこうした権利を日本に住む人々が享受できているかは大いに疑問が残る現状だ。2025年時点でのジェンダーギャップ指数は118位に止まり、日本性教育協会による『「若者の性」白書－第8回青少年の性行動全国調査報告』では、日本の中学で性教育に割く時間は3年間で平均7時間前後と報告されており、先進国の中では非常に少ない。

このように包括的性教育が進まない背景に、教育分野における性教育に対する長年の偏見や、慢性的な人材、並びに時間のリソース不足の問題が存在する。筆者はピアエデュケーターとして、NPO法人にて性教育の講演ボランティアに従事しているが、外部団体として性教育の講演を行う場合は基本的には学校側の依頼を受け、依頼内容に合わせた要項を組み、当日は対象生徒に対し1時間程度の講演を行う。実際の講演先の学校では、性教育拡充の必要性を感じている現場の教職員は少なくないが、意思決定権を持つ管理職には性教育について世代差もあいまって偏見を持たれることが多い。学校全体の理解や性教育への意識が薄い状態では、人的・時間的リソースを割くことも難しい。そのため、わずかな時間を割

いて外部団体への性教育の講演を依頼することが、教育現場における性教育のジレンマを緩和するための現実的な妥協策となっている。性教育に必要なリソースを一時的に外注できることは、リソース不足に悩む現場にとっては大きなメリットだが、しかしながら外部団体による講演では当然生徒との関わりも薄く、講演内容も学校の依頼に合わせた一部の内容しか実施することができないというデメリットもある。

このように、日本における包括的性教育の普及には、「性教育に対する偏見と誤解」「リソース不足」という課題が非常に根深いものとなっているが、更にこの2つの問題に加えて性教育従事者から問題視されているのが、性教育を学んだ後に待ち構える「実践の難しさ」である。そもそも前述したように性教育にかける時間が非常に短い中、さらに被教育者が今後の生活で知識を適切に活用することはほぼ不可能に近い。たとえ充実した性教育を受ける機会に恵まれたとしても、包括的性教育を受けたことのない世代の方が多い日本の現状では、常に周囲の知識不足や無理解という名の壁も伴う。そうした現状が、やがて性暴力や望まぬ妊娠など命にかかわる事態を引き起こすことも決して少なくはない。知識として学ぶことと、それらをどう社会生活で生かすか実践的な方法を知ることは切っても切り離すことができない。筆者含め、従事者の多くは身を以てそれを知っているが、現場は知識を詰め込む時間すら足りないという状態で、知識の適切な実践まで教育として網羅するのはあまりにハードルが高く、非現実的だ。しかし日本の国際社会におけるジェンダーギャップ指数の低さ、またその数値に現れる格差はこれ以上看過できるものでもない。

ここまで様々な問題を指摘してきたが、日本における包括的性教育の普及には、特に「リソース不足」をいかに乗り越えるかが重要であるとも言える。だが性に関する授業を行うには、あまりに時間も人材も追いつかない。しかし仮に、授業に依らない形で「生徒が性に関する学びを得られる場」を学校内に作ることができれば、授業よりもリソースを抑え、且つ性教育の機会増加を図ることが可能になるのではないか。

このような観点から、「授業に依らない形で、性について安心して学べる場」の創造にはオルデンバーグの提唱したサードプレイスの概念や、ピアエデュケーター

の介在が有効ではないかと仮説を立てた。サードプレイスとは、ルールのもと参加者が安心かつ安全を感じられ、他者に自分らしい在り方を損なわれることなくリラックスできる、「第3の場所」を指す概念である。サードプレイスに該当する空間は、カフェや公園、図書館、自助グループ、現代ではSNSも含め多くの例が挙げられる。特に障害を持つ人々やマイノリティにとって、自助グループは参加者が抱える悩みや問題を話すことのできる共同体であり、居場所でもある。そこでは参加者らに「安心できる場」が提供され、時に明確な答えが見つかりにくいテーマを共有し、行われる何気ない対話や相談を通して、自分なりの答えや生活の中で活かせる「実践」そのものや、その糸口を掴むこともしばしばだ。このような場合、サードプレイスは対話を用い、知や実践を引き出す装置としての機能を持ち合わせると言える。こうした背景から、筆者はサードプレイスを性教育の分野で応用を模索することにした。対話を通じて知識と実践の双方の学びを養うという方法は、性教育における被教育者（生徒）の知識から実践への接続という課題に対して、有効な手立てになりうると考える。本研究では、高等学校内に性教育、およびピアエデュケーターの介在を主軸に据えた「性について対話できる」サードプレイスの空間を作り、性教育において学校現場が抱えている課題に対する有効性の検証などを通し、日本の性教育普及への貢献を目指す。

1.2. フィールド：K 高校とその課題

今回調査に協力いただいた K 高等学校（以下、K 校と表記）は中高一貫制の私立女子校であり、都内有数の進学校でもある。性教育に長年力を入れており、生徒たちは中学1年次および高校1年次のタイミングで学校独自の包括的性教育を実施している。入学から卒業までの6年間の教育のうち2年間、計60時間以上と日本の他の学校と比較しても非常にしっかりとした取り組みが伺える。しかしながらこういった学校でさえ、あまり性教育に割く手間がない学校と同様に、現場からはリソース不足を指摘する声が上がっている。具体的には10代に合わせた指導カリキュラムのアップデート等と、それに伴う人的リソースの不足である。学内には性教育委員会という組織が存在しており、学科を超えた教員のチームとし

て性にまつわる内容を共有し、様々な学科から盛り込んでいるものの、主だった性教育を担当するのはやはり体育科の教員である。その体育科の中でも性教育を専門的に扱える教員の数は限られており、社会の変化に合わせ授業内容を都度変更していくのは現実的に難しい、と感じている状況にある。そうした中でも、合間を縫って毎年1度ほどのペースでカリキュラムの更新を行なっているそうだが、近年学内でも生徒のスマートフォン利用が解禁されたことに伴い、SNSがもたらす危険性への対応が後手に回っているという課題意識が強まっている。

また、学内での教育の実効性について課題を感じる教員の声も聞かれた。K高校の性教育を受け持つ教員らは、「教育は種まきである。」と述べる。「学校に所属する全ての学生の学びに関して、卒業後も教員に責任が発生するわけではないし、当然彼らに対して介入ができるわけでもない。しかし、必要な性教育を教えただけの生徒から、卒業後に性に関するトラブルや望まない妊娠の相談を受けることに関して、複雑な気持ちになる。」と、ある性教育を受け持つベテランの女性教員は話す。このように、K高校は他校と比較して性教育に関して非常に力を入れている学校であることは間違いない。しかし、実際にはリソース不足やSNSへの対応に苦慮していることに加え、性教育を学んだ生徒が実践する難しさや、生徒と教員間における「教えたい性教育」と「教わりたい性教育」のニーズの違いなど、「性教育ギャップ」とでも言うべき課題も見えてきた。

1.3. 本論文の目的と構成

こうした状況を鑑み、本研究ではK高校に協力を依頼し、第1学年の生徒を対象に性教育を基軸としたサード・プレイスの要素を取り入れた、性にまつわる雑談会「セクソロジールーム」というワークショップを開催することとなった。性教育を伝える上で、身近な存在としてのピアエデュケーターが関わることの重要性に着目し、セクソロジールームがもたらす価値や体験、及び教育現場への影響/有効性、その価値について論じていく。第2章では、日本のこれまでの「性教育」の変遷や現在の状況、ピア(仲間)を通じた関わり、教育現場におけるサード・プレイスの空間などについて先行研究や先行事例を紐解く。第3章ではセクソロジー

ルームの詳細や設計経緯、第4章では実際の開催やフィードバックを元にその価値について検証し、第5章ではこうした取り組みの持続可能性に付随する課題とともに、性教育における今後の展望に言及する。

第 2 章

関 連 研 究

2.1. 日本における性教育の変遷と課題

性教育は、人々の健康と福祉を支える重要な教育分野である。しかし、その実施方法や内容には国ごとに大きな違いがあり、生徒たちが受ける体験も多様である。特に、日本においては、歴史的経緯や政策の影響によって性教育が制限されており、生徒たちは「学びの機会を奪われている」「現実とズレている」と感じる人が多い実態について述べる。

2.1.1 性教育の歴史的背景と現状

日本の性教育は、戦後の混乱期に「純潔教育」としてスタートした（西岡, 2018）[1]。1960 年代以降、性に関する情報が社会に広がるにつれ、より包括的な教育への転換が模索された。しかし、2002 年の「性教育バッシング」（七生養護学校事件など）により、学校における性教育はその指導内容を大幅に制限され、教育現場は大いに萎縮した（浅井, 2018）[2]。一般に「はどめ規定」と呼ばれるこの制限は、現在では守るべき教育基準として厳格化されてはいないものの、制限された教育基準が改められることなく引き継がれ、性教育という項目自体が形骸化している学校は少なくない。「学習指導要領ありき」の性教育が行われ、生徒の関心や実際の経験とは乖離した教育内容になっているのが実態である（浅井, 2018）[2]。

2.1.2 性教育に対する生徒の受け止め方

Pound ら (2016) [3] による国際的な研究では、日本を含めた各国での高校生を対象に、性教育に対する生徒らの意識についての調査結果が報告されている。ここでは各国での共通の問題点として、① 学校では「性」が特別な話題であることを考慮せず、他の教科と同じように教えられる ②ジェンダーバイアスによる弊害③教員指導への不信感などが性教育における被教育者と教育者の間に存在すると述べられている。さらに、近年の SNS の普及によって性に関する情報が氾濫し、学校での性教育との乖離が一層顕著になっている (Lisa M & Ginny L. Ryan, 2016) [4]。生徒たちは「ネットにはあるのに、学校では学べない」と感じるものが多く、その結果、誤った情報に頼らざるを得ないという悪循環に陥っているという現状が指摘されている。

2.2. 学生たちにとっての居場所：コミュニティとしての視点から

そもそも、性教育を受ける対象である生徒らが持つコミュニティとは一体何か。一般的に、これを構成する主なコミュニティとしては家庭と学校が挙げられるだろう。しかし、その「コミュニティ」で満たせないニーズがあれば、他の居場所を求めることは想像に難くない。そのような場合では、生活における行動制限が多い子どもたちが活用するのは必然、SNS を中心とするインターネットである。では、果たして SNS は子どもたちにとって、充実した良い学び場となりうるのだろうか。Lisa.M ら (2015) [4] の研究では、SNS の利用によって、関心や感情の捌け口を得られるなどのメリットはあるが、同時に自尊感情に悪影響を及ぼすリスクに晒されていると指摘されている。彼らによると、こうした SNS はデメリットばかりではなく、利用状況のメジャーさを逆手にとって、メンタルヘルス等に生かす取り組みもあるものの、未だ有用性を示すには至っていないと述べる。しかし 2023 年に行われた国際協力 NGO ジョイセフによるインターネット調査によれば、半数以上がネットや SNS で性に関する知識を得ていると回答している。これ

までのことを踏まえると、SNSを一概に悪いと断ずることはできないが、SNSが捌け口の唯一の選択肢となることは望ましくないことは確かである。では生徒たちにとって、性の知識を得る上でどのようなコミュニティの選択肢があると良いのだろうか。

久野 (2023) [5] は、その一助となるような事例を紹介している。大阪市のNPO法人が開催していた学校図書館での「ぴっかりカフェ」というもので、そこでは子どもたちが地域住民やボランティアの学生らと交流したり、思い思いに過ごすことのできる場が提供されており、中にはそれを支えに登校を続けている生徒もいた。このような事例も踏まえて、久野 (2023) は、図書館という場所を「趣味も関心も、文化的・民族的背景も生活環境もまったく異なる普段出会えない様々な人々や、思いがけない情報や多様な知識、周辺の文化とも出会える貴重な場として機能している」と述べており、別の研究では図書館が持つサードプレイスとしての価値にも言及している (久野,2016) [6]。このように、「ぴっかりカフェ」は、日本での一例だが、こうした対話や交流の場所として機能し、教科書以外から学びを得ることのできる空間であり、学校におけるサードプレイスの空間であった。

2.2.1 安全な対話を行う空間に必要なルールとは

しかしながら、性教育の領域においては、とりわけ日本において、生徒らは誰と/どのように、対話の場としてのサードプレイスを持てば良いのか。サードプレイスという概念については、レイ・オルデンバーグによって8つの要素（ニュートラル・グラウンド＝中立の領域であること、平等性、目立たない存在、利便性と利用しやすさ、主な活動が会話であること、常連の存在、遊び心のある雰囲気、第二の家＝居心地の良さ）が備わっている必要があると述べられている [7]。しかしながら、性に関する話題は往々にして同席する人間の居心地を悪くさせたり、傷つけてしまいかねない危険性を持っている。こうした問題に対し、Arao ら (2013) は、より良い議論や対話の場は、「ブレイブスペース」であるべきだとして、その条件として① 意見が異なることへの同意 ② 個人的な内容として受け取らない ③ 「挑戦」は自分の選択の範囲で行う ④ 場にいる相手への尊敬 (尊重) ⑤ 攻撃の禁止 ⑥ 自身が無自覚に差別をしまうことを念頭におくこと、という6つのルールを提

唱している [8]。とりわけ、性の話題は毒にも薬にもなりうる中で、発言の責任や心理的境界線について明確化しておくことは、非常に重要だと考えられる。

2.3. ピアエデュケーターとの関わりがもたらす効果

ピアエデュケーターとは peer(仲間)、被教育者あるいは特定の知識などを必要とする者にとって、仲間のような存在、つまり近い属性や価値観を持つ教育者を指す。例えば先述の「びっくりカフェ」では、ボランティアに来ていた大学生などが最も近いだろう。現代の性教育においては、単に知識を伝達するだけでなく、生徒同士の対話を通じた学びの重要性が高まっている。特に、ピアサポート (Peer Support) や ピアエデュケーション (Peer Education) は、若者が主体的に学び、共感を通じて健康的な態度を形成する上で極めて有効な手段となる。ピアによるサポートの有効性は、時山ら (2017) [9] の研究が分かりやすい。ここで行われたのは、がん患者が抱える孤独感や絶望感、不安感情について、ピアエデュケーターの講座を受講したがん体験者が、患者らと語り合うというものである。多くの患者が、ピアとの対話や交流の機会を持つことでやすらぎや共感を得られ、闘病に伴う不安感の解消につながったと回答している。身近な経験者というのは、それだけで不安を感じる当事者にとっては貴重な存在だ。

その他、日本の性教育におけるピアエデュケーションの実例としては、坪井 (2023) [10] によるデート DV の予防授業や、渡部ら (2005) による中高生向けのエイズ教育におけるピアエデュケーションプログラムについて紹介されている。坪井 (2023) は、10 代の若者たちにおいては関わる人間が限られてしまう側面があると述べ、そのような場合に身近な先達者であるピアエデュケーターとの交流を通じた学びは非常に重要な機会であると啓発している。また、過去世界で猛威をふるったエイズの予防的性教育においても、ピアエデュケーターが実際に授業に関わり、同世代の青少年らに対して身近なロールモデルとなることで、教員が行う教育内容に対して補完的な役割を担うことが確認されている (渡部, 野津 2005) [11]。

しかしこれらの関連研究では、逆説的に多感な時期を過ごす 10 代の学生たちが性を主題に安全に語れる空間が、日本にはほとんどないことを示唆している。厳

密には、学校外であればにじず¹のように、若年層の性的マイノリティに向けた居場所作りの取り組みは存在し、他にも全国的に様々な場所で、性に関する学びや居場所作りの取り組みは行われている。しかしながら中学や高校といった学校内に、性についてフォーカスした恒常的な対話の場となると、やはり大きな認知を得ている事例はない。

2.4. 本研究の意義

以上を踏まえ、本研究ではピアエデュケーターであり、セクシュアルマイノリティ当事者でもある研究者自身が介在しながら、生徒らと共に学校の中で「安心して性について話すことのできる」対話・交流の場としての「雑談会」という場を設計する。雑談会では、生徒たちに授業とは異なる形と関わり方を通じて、性について学ぶ機会として機能することを目的とする。最終的には、生徒や教員が感じる性教育にまつわるギャップを埋める場、性への好奇心の受け皿として機能することを目指す。

1 「LGBT やそうかもしれない子ども」たちが集まって交流し、遊ぶことができるオープンデーを開催している一般社団法人

第 3 章

デ ザ イ ン

3.1. セクソロジールームとは

セクソロジールームとは、K 校に所属する生徒と外部のピアエデュケーター、そして時には教員らも含めてゆるやかに関わり合いながら、生徒にとって「学校内で安全に、そして自然な形で性を語れる空間」になるようデザインされた雑談会の名称である。セクソロジールームではピアエデュケーターによる司会進行のもと、性に関わるあらゆるトピックについて対話し、生徒らが抱えるニーズに柔軟に応えられるよう設計されている。セクソロジールームは生徒たちにとって気軽なアクセス可能な場所となるよう学校内での開催を前提としたため、開催にあたっては学校側との協議や検討を重ねた。第 3 章では、セクソロジールームのデザインコンセプト、およびそれに至るまでのデザインプロセスについて詳細に述べる。

3.1.1 前提

デザインについて言及する前に、改めて研究の協力先である K 高校の性教育にまつわる基本的な環境、および研究における重要な背景情報として、筆者の属性と一部経歴についてここで触れておく。

フィールドワーク先の環境

学校全体の生徒数は 720 名（2025 年 4 月 1 日現在）。本研究の主な調査対象である高校 1 年生は 241 名と多くの生徒が在籍している。生徒らの自主自立を校風と

して掲げており、文系から運動部まで、非常に多くの部活動があることも特徴的だ。85年という歴史の中で女性が校長を務めたこともあったが、現在は理事長、校長、教頭の全員が男性である。女子校である場合、性教育に関しては特に保守的な姿勢となっているケースも散見されるが、K高校の場合は趣が異なる。自主自立の校風と合わせ、同年代の男性の目を気にせず性教育を学べる環境が整っている。6年間を通し、保健科に限らず、社会や生物、家庭科といった複数の教科から性に関する様々な価値観を養うが、とりわけ高等部1年次では保健の履修が盛り込まれており、包括的性教育が重点的に行われる。この授業で使用する独自のテキストの内容は、性の多様性から妊娠出産、社会との関わりまで非常に広い範囲が網羅されているものの、人手不足も手伝って、カリキュラムの更新にまで手が回ることはいまだ多くない。

また、性教育について全国でも有数の充実した教育環境が作られている一方、これまでK校の性教育に携わってきた教員らの声や、在籍生徒の反応を見ると、教員と生徒の間には、「性教育ギャップ」とも呼べるニーズのずれ違いが存在することが分かった。詳しくは後述する。

筆者の立場と背景

筆者は2023年6月から性教育の講演活動を行うNPO法人にて、関東圏の中学や高校への訪問を中心に講演ボランティアに従事している。ボランティアとして活動するにあたり、当該団体にてピアエデュケーターとしてファシリテーションをはじめとする基礎的な研修を受講し、その後複数校での講演活動に携わった経験を持ち、他にも性的マイノリティやアライが参加する交流会の運営などに携わっている。また、筆者自身はK高校の卒業生であり、かつては生徒として同校の性教育カリキュラムを受けていたという背景を持つ。こうした背景から、ピアエデュケーターとしての実績があるということに加え、卒業生という立場による関係性も含んだ上で、非学校関係者ながらも性教育というセンシティブな題材を扱う調査を実現させていただけることとなった。

3.1.2 デザインコンセプトと基本構成

セクソロジールームの学校内における位置付け

セクソロジールームは学校内部に存在しながらも、その内実は学校と利害関係を持たず、独立した空間である（図 3.1 を参照）。そして主な参加者は生徒だが、生徒のみならず学校には様々なステークホルダーが存在している。独立していながらも、学校内に存在するという矛盾を孕んだ空間を成立させるためには、ステークホルダーのうち連携可能な組織や人物と協力しながら、セクソロジールームの運営のための土壌を整える必要がある。最低でも学校、保護者、そして生徒の同意は不可欠であり、教員からの理解や協力も欠かせない。図は、大まかに学校という空間においてセクソロジールームが機能する場合のステークホルダーとの関係図である。ただし本研究では、支援団体や相談機関との連携はとっておらず、あくまで必要に応じた紹介に留めている。

このように、学校内に存在する場の最低条件として K 校の規則に準じつつも、できるだけオープンな情報共有や安全管理を徹底し、学校内外に周知することで独立した場としての機能を維持しているのがセクソロジールームという場である。

コンセプト

セクソロジールームは、性について興味関心を持つ生徒に向けて、『性のリアル』を知り、考え、対話を促すための雑談会』というコンセプトで企画されている。これは性教育分野において、授業という限られた時間の枠組みでは生徒のニーズへの対応や、基礎からさらに掘り下げた内容を扱うことが難しいという実態から生じる「性教育ギャップ」

名称については英語で性科学という意味の“Sexology”から引用した。性科学という単語は日本ではあまり馴染みがないかもしれないが、生物学、心理学、社会学など性にまつわるあらゆる学問を越境的に扱う分野である。K 校で扱われる性教育カリキュラムでは、“Human Sexology”という独自のテキストがあり、生徒にとって比較的に見慣れた単語であること、且つこの雑談会では性にまつわる事柄を広く扱うというメッセージも込めて、同様の語を採用した。また雑談会というス

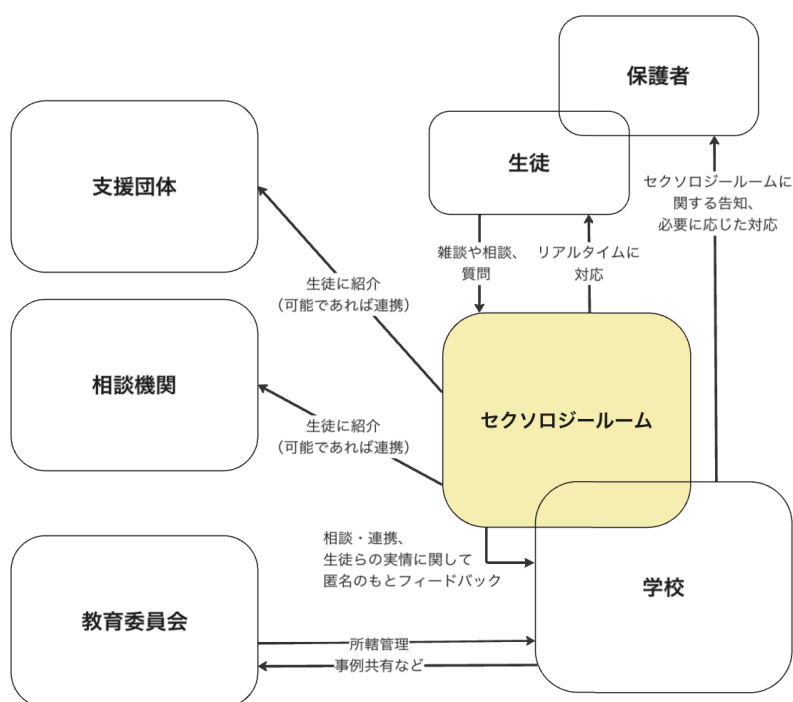


図 3.1 ステークホルダーとセクソロジールームの関係図

セクソロジールームのデザイン構造

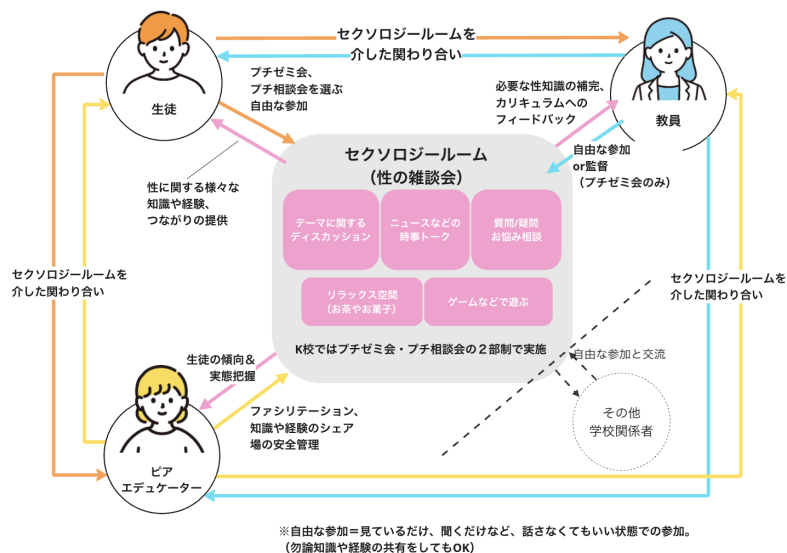


図 3.2 セクソロジールームのデザイン構造

タイトルを基本軸としつつも、サードプレイスの観点から対話は強制されず、訪れた生徒自身の好きな過ごし方を尊重する姿勢を持たせたいという意図から「ルーム」を付け加え、名称を「セクソロジールーム」とした。

会の構成

本会はピアエデュケーターである筆者1人と数名の生徒の参加を想定し、校舎内にて放課後2時間を使って開催される。またセクソロジールームは、自由に参加可能だが対話のテーマが決められている「プチゼミ会」と、1組限定で相談を受け付け、話すテーマは問わない「プチ相談会」による2部制（各1時間ずつ）で構成されており、性にまつわる「おしゃべり」ないし「雑談」をするという構成となっている。

3.1.3 本研究におけるピアエデュケーターの役割

セクソロジールームは性を語り合うサードプレイスとしてデザインされている。その中で、ピアエデュケーターは空間をコントロールする重要な役割を担っている。性について話す場であり、参加者の多くが思春期の生徒であるという特性上、リラックスできる環境作りやコミュニケーション上の安全管理については特に欠かすことができない。ピアエデュケーターとして会の主催、およびファシリテーションを行う上で重要な点は以下の通りである。

ピアに当てはまる属性と親しみやすさ

生徒から見て peer(仲間) に当てはまる属性を持っていることは前提である。しかし、たとえピアに当てはまる属性を持っていたとしても、仲間として親しみを感じるかどうかは生徒らが決める。ファシリテーターを務めるピアエデュケーターが生徒にとって身近な存在であればあるほど、サードプレイスとしての機能が維持され、リラックスした状態で自然な対話が発生しやすくなる。さらに、教員とは異なる立場であり、生徒と利害関係を持たないことは参加者の心理的安全性にも大きく寄与する。仲間としての認知、または親しみやすさについては、教員の方々との連携をはかりながら事前告知に伴う自己紹介などで、エデュケーター自身の背景を知ってもらうことが、生徒のルーム参加への関心を高める上で重要である。

安全を管理するためのファシリテーションスキル

対話を促すことはもちろん、特に安全管理においては参加者らにグラウンドルールを遵守させ、維持するための技術を持っていることは重要な要素だ。セクソロジールームでは性について話すことが不慣れな参加者が多く、対話の内容がセンシティブ、あるいは差別的な内容を含んでしまうケースが想定される。そうした際に適切な注釈や中断を行うことが、場の心理的安全性や参加者同士の関係性の維持においては重要である。

性教育、または性に関する様々な分野における正確な知識

上記の適切な注釈や中断を行うために、これらについて即時的に判断できる正確な知識を持っていることは重要な要素である。また、無秩序な場は他者の安全や安心を損ねてしまう。リスクを避けるためピアエデュケーターは必要に応じて中立な情報や視点の提供など、場の機能を維持する役割を務めるが、あまりに調停者然とした振る舞いはピアとしての属性を薄めてしまいかねず、適切な対話の障壁となることが考えられる。場がヒートアップするなど無秩序的な状態に陥る可能性が高い状況での介入以外は、原則的に他の参加者らと対等に場に参加し、ピアな存在としての実体を持つことで、参加生徒らがよりリラックスしやすい環境の形成につなげる。

3.2. デザインプロセス

セクソロジールームのデザインコンセプトは筆者自身の約1年4ヶ月間(2024年10月まで)の性教育の講演ボランティアや交流会での活動経験に基づいて設計したのち、K高校での実施にあたって現場から校長に至るまで様々な教員の方々にヒアリングを行い、再設計されている。会の主な対象者は生徒だが、開催にあたっては実施許可をもらう必要があったため、開催に伴う学校側の負担についても慎重に考慮した。次節より、コンセプトに至った経緯について説明する。

3.2.1 民族誌調査から見てくる学校の現状

1. 性教育に関する教員への民族誌調査

教員 A

教員 A さん(50代)は体育科に所属しており、現場で長年性教育カリキュラムの教鞭を取っている。“人間と性”教育研究協議会に所属しており、吉祥女子にとどまらず、日本の性教育の第一線を知るベテランの教師である。「性教育は扱いが難しい科目な上、あまり真面目に受けない学生もいるけど、そういったのも含め

て、自由な姿勢で受けさせることにしている。」と彼は語る。「一人一人状況も違うけど、なるべく主体的に考えることができるよう、期末には自主的にテーマを選んでもらい、プレゼンをする機会(=個人授業)を設けている。」このような教育は、「性教育とは種まきである」という認識に基づいて行われているものだ。一方で、「学校でどこまで教育を担うべきなのか、という(話)。カリキュラムの内容は、社会の変化に対応できるよう、最低でも年に一度アップデートするようにしているけれど、正直なところ、ひとりでは手が回らない部分も多い。また性教育に関しては網羅する内容の幅広さ故、「学校でどこまで教育を担うべきなのか、という部分もある。カリキュラムの内容は、社会の変化に対応できるよう、最低でも年に一度アップデートするようにしているが、正直なところ、ひとりでは手が回らない部分も多い。あと包括的性教育を全面的にカバーするとすると、後継の教員を育てることもなかなか難しいよね。」と語る。

教員 B

教員 B は K 校で 10 年以上にわたって性教育を教えており、そうしたキャリアの中では時に「卒業した生徒から相談を受けることもある。」と語る。「性教育の授業では、常に重要なことについては念を押して教えるように努めているし、進学校なこともあり、受験などとは関係のない性教育に関する内容であっても、テストの結果などが著しく悪いわけではない。しかし卒業後の生徒からは、望まない妊娠への相談や、避妊について相談する声も届く。」こうした状況において、教員 B は自身が性に関するトラブルが起きた時に相談する相手として頼ってもらえることは嬉しいことだ、と断った上で「ただ、事前にこうしたトラブルにつながるような行動は避けるべきだと分かっているけども、トラブルに陥ってしまう場合もある。分からない、知らないのであればとにかく、きちんと問題だと認識した状態でそれを回避できないとなると…。自分たちが教育に関わった後のことだとはいえ、そうした問題に対して教員はどのような対応や対処が可能なのか、憂慮する日もある。」と語ってくれた。

2. 安全管理

性について話す、というコンセプトでの雑談会は、一方で非常にデリケートな問題にも発展しうるリスクが存在する。こうした事態を未然に防ぎ、参加者らの心理的安全を守るためにグラドルールの配布と外部相談窓口の紹介（図、または付録を参照）などを行なう。さらに、性教育を担当する教員の方1名に協力していただき、監督役として会に常駐していただくことで、事前に必要な安全管理を徹底する。

3.2.2 “性の対話”のための仕組みづくり

この雑談会のデザインにおいて、核となるのは対話である。対話とは意思や意見、感情のやり取りである。性に関連する対話を促すためには、その話題に対するハードルや緊張感を下げるため、参加者らがリラックスできる安全な環境づくりとして特に重要だと思われる以下の項目を設定した。

- グラウンドルールの策定、及び配布
- 会の冒頭で「呼ばれたい名前」などの個人を尊重する方法での自己紹介を行う
- カードゲームを用いた自己開示によるアイスブレイク（プチゼミ会のみ）

また、セクソロジールーム、特にプチゼミ会においては参加者の人数を事前に正確に想定することはできない。参加人数に応じた対応として、以下のパターンを想定した。

参加人数が少ない場合（ピアエドューケーター1人に対し、生徒が5人以下）

参加者らがそれぞれ気になるテーマや質問などをシェアしあい、理由や感想などを交える。ピアエドューケーターは基本的に見守りつつ質問への回答や補足を行い、発言量の偏りに配慮しながら対話を促す。

参加人数が多い場合（ピアエデュケーター 1 人に対し、生徒が 5 人以上）

参加者らに気になるテーマがあるかどうかを聞き、リストアップする。その中から更に参加者らに手を挙げてもらうなどの投票行為によって選んでもらうことでテーマを絞って雑談会を行う。この場合は人数の関係上、主にピアエデュケーターと他の参加者らの 2 者間という構図での対話を行うものとする。また、これらは対話に消極的な参加者が多かった場合や、互いに関係性の深くない生徒同士が参加した場合も同様の形式で対応する。

3.2.3 グラウンドルールの策定

グラウンドルールは参加者らの互いの安全を守るためのものであると同時に、参加者らの負担をあらかじめ想定し、過ごし方や入退室についての選択肢を事前に明示するものである。加えて、セクソロジールームの中で性に関する個人的な経験などを共有する可能性があることから、参加者によるアウティング¹や、それに伴うトラブルなどを予防するための項目を盛り込んでいるが、参加者らに過度な緊張感を持たせることがないように、簡潔かつ必要最低限度のものにとどめた。また本来こうしたことがあってはならないが、ピアエデュケーターや教員らによって生徒に対して性的グルーミング（手懐け）が行われる可能性を考慮し、その防止策として外部の相談窓口などを紹介している。（グラウンドルールの詳細な内容については付録 DD.1 を参照。）

3.2.4 性教育ボランティア活動を通じた複数の教育現場の参与観察

生徒と「性の話題でつながる」ことの難しさ

講演ボランティアに従事する中で、各学校のリソース不足の問題が見られたことは既に記した通りであるが、ここでは特に活動の際の参与観察を通して得られ

1 他人の性的指向や性自認について、本人の同意を得ることなく第三者に暴露してしまうこと。とりわけ、性的マイノリティ当事者である本人がクローゼット（その事実を周囲に隠している）場合、当事者の心身や取り巻く環境に深刻な影響をもたらす。

た、講演に対する生徒らの反応について記述する。講演において、クイズの実施や数分程度の短いディスカッションタイムを設けることがよくある。その際に生徒が積極的な反応を示すかどうかについては、依頼元である学校の校風が非常に大きく影響している傾向にあった。例えば公演中のおしゃべりに対してあまり厳しく注意をしない学校では、クイズやディスカッションにおいても積極的な傾向が見られた。その学校では普段の授業においても積極的に議論を交わすことを推奨しており、そうした側面が大いに影響していると考えられる。一方、別の学校では講演中の私語について非常に厳しい注意を行っており、講演中のクイズやディスカッションにおいても萎縮したような雰囲気を感じられた。こうした経験から、生徒らは場の雰囲気や校風に影響を受けやすい存在であることを再確認した。

また、講演活動では学校から依頼があった場合に限り、講演終了後に相談会を設ける場合もあった。しかしながら、こうしたケースでは実際に生徒がやってくることはごく稀である。背景には、生徒のプライバシーに配慮した結果、質問会を開催している場所がわかりにくくなってしまうこと、講演活動でスポット的に来訪するボランティアとでは信頼関係が築きにくいこと、また「相談会」と紹介されることで生徒にとって参加への心理的抵抗をもたらしているのではという懸念があった。

こうした背景から、セクソロジールームのデザインでは親しみやすいカジュアルな雰囲気作りや、複数かつ連続した「性の対話」の機会の提供を盛り込んでいる。

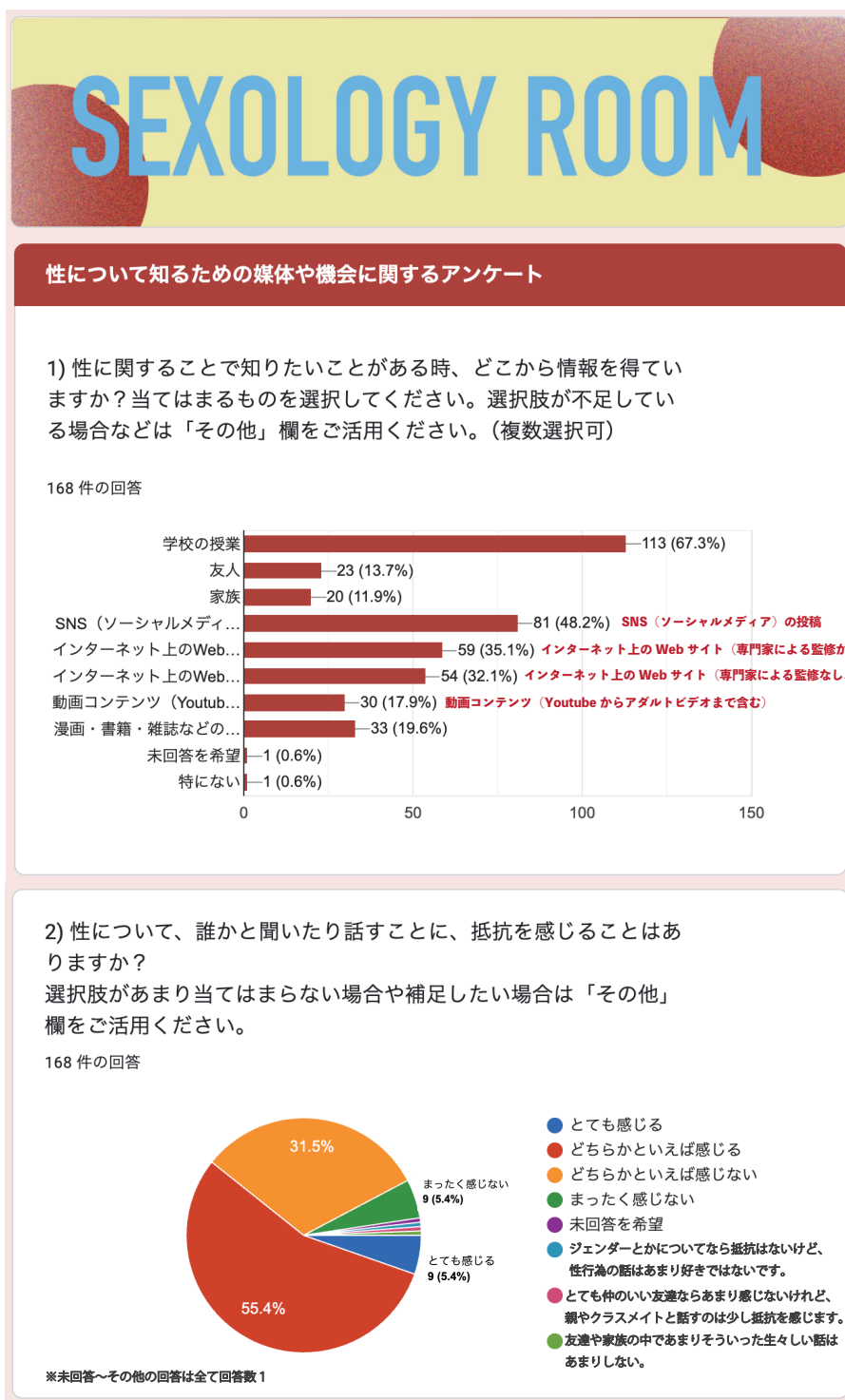
3.2.5 K校での個人発表授業

K校では性教育カリキュラムの一環として、1～2学期に性教育について学んだ後に3学期では「個人発表」という単元が存在する。これは個々の生徒が関心を持ったトピックについて、1人あたり10分ほどでプレゼンを行うというものである。プレゼンを行なった後は質疑応答の時間が設けられ、発表内容によって違いはあるものの、様々な質問や感想が闊達に飛び交う。発表内容は学術的である必要はなく、教員は基本的に発表内容に関与しないため、「推し」のアイドルや女子校における先輩文化といった身近なテーマや流行りの話題など、取り上げるテーマの幅広さが大きな特徴である。発表者が同じクラスメイトという「身近さ」が

あるため、通常の教員が担当する授業と比較すると、質疑応答を通じた相互的なコミュニケーションが成立している。

3.2.6 事前アンケートから見る生徒のニーズと教員とのギャップ

2025年度の高等部1年生を対象に、事前アンケート（結果や項目の詳細は付録Aを参照）を実施した。これは、性への興味関心や性教育に対する意識について、生徒たちの傾向を掴むためのものである。その結果、K校のカリキュラムに則り授業を受けているものの、性に関して多くの生徒が様々な疑問や関心を持ち、その上で、既存の人間関係の中ではそうした話題を話しにくいと感じていることがわかった。

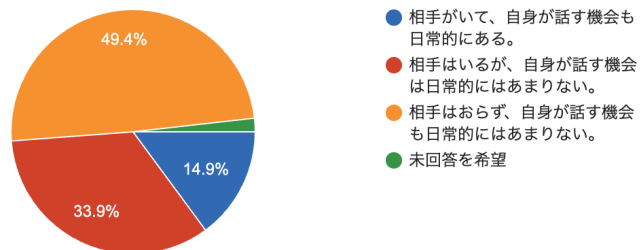


3-1) 性について気軽に話せる相手や、または日常的にそういった機会がありますか？

選択肢があまり当てはまらない場合や補足したい場合は「その他」欄をご活用ください。

(対面、オンラインなど形式は問いません。)

168 件の回答



「性について知りたい、あるいは誰かに聞きたい、話したいことはあるか」という設問（自由記述）にいたっては、全 168 件の回答のうち、48 件もの疑問や悩みが寄せられた。今回の調査では性の在り方や定義自体に関するもの、性的マイノリティ当事者との関係性への悩みなどが多かったが、性的経験や性欲、生理に関する悩みなど、その内容は非常に多岐にわたる。アンケートの結果を見ると、生徒らは「先生や友人、家族相手には言いにくいし聞きにくい、性に関することで誰かに話したい、聞きたい、困っている」というニーズが明確にある一方、日常で会う相手だからこそ関係性を壊すようなことは避けたい、そのために性について話せる相手や機会がないと感じていることが浮き彫りになった。

一方、アンケートの結果からは関心のある分野に偏りがあり、また多様な記述から、生徒一人一人が強い関心を持つトピックも異なることが伺える。しかしながら、一方で教員側からすればどの分野も非常に重要で、満遍なく学んでほしいという思いがある。3 学期に個人授業という生徒の興味関心がある程度判明するカリキュラムが控えてはいるが、教員側としては授業時間の不足や、人員の余裕がないことから、個別のテーマに関して、補足や注釈が追いつかないことがあるという。生徒が日常において性について様々な関心を寄せる中、それらに寄り添い、対応することは難しく、生徒側から見ても、「教科書的」な学びでは疑問が解消されないという性教育特有のギャップが生まれてしまっている状態である。

3.3. セクソロジールーム: プロトタイプ (2024 年度実施)

2024 年度 3 学期に 2 度、当時の高等部 1 年生の一部クラスを対象に、放課後の時間をを使い、現在のセクソロジールームのプロトタイプにあたる雑談会を告知・実施。ここではプロトタイプを通して得られた知見について手短かに述べる。



図 3.3 会の様子 a

3.3.1 セクソロジールーム: プロトタイプの実施

プロトタイプ第一回の様子

1名の参加者あり。知る限りではそうではない社会とのギャップに加え、就職の見通しを含めた進路について悩んでいるということだった。プロトタイプでは、進路、性教育、気になるニュースといったトピックに少しでも当てはまれば、生徒主導のテーマで自由に話すという方式をとっていたため、進路について話を広げた。途中から、生徒の同意を得て体育科の教員も1名参加し、放課後2時間をまるまる使いK校卒業生の進路や生活実態について話題が弾んだ。

プロトタイプ第二回の様子

4名の参加者あり。互いの自己紹介から、書籍や議論を聞くことに興味を持ってくれた生徒や、セクシュアリティの話題について話したそうな様子の生徒など、ニーズの異なる生徒らによる参加があった。開始から1時間ほどで閉会となり他の生徒がいなくなると、会に参加していた生徒らから、それぞれ性自認や抑圧的



図 3.4 会の様子 b

な家庭環境にまつわる相談や、性的指向と障害に対する悩みや不安感についての相談を受けた。この回では体育科の教員 1 名も会に参加しており、教員の方と共に話を聞きながら対応を行なった。

3.3.2 プロトタイプから得た知見

雑談会の今後の実施にあたって、まず参加人数の少なさが課題となった。参加生徒からは、「告知回数やリマインドが多いと関心が薄い友達も誘いやすい。」「もっとこういった機会を増やしてもらえれば、部活がない日などを調整して参加しやすい。こういう場がもっとほしい。」という声があがった。保健の授業の時間を借りて告知などを行なったが、実際には生徒と部外者であるピアエデュケーター自身との間でラポール形成が行われる機会がほとんどない。性というセンシティブなテーマを扱うのであれば尚更重要な要素である。

参加したいと考えている生徒らに、少しでも気軽にセクソロジールームに参加したいと思ってもらえるような関係値をどのように形成し、アプローチするかが

今後の焦点として持ち上がった。また、会においてニーズやモチベーションが大きく異なる生徒同士が参加した場合の対応策を考える必要性も浮き彫りになった。

3.4. セクソロジールームの再設計

3.4.1 参加生徒のペルソナ像と調整

プロトタイプでの参与観察を踏まえると、生徒は以下の4タイプに大別される。

- 性への軽い好奇心で来る生徒
- 性の悩みを抱えている生徒
- 性の分野に対して学問の側面から関心が高い生徒
- 友人に連れられて来る生徒

こうした点を踏まえ、現在のセクソロジールームでは複数人での対話がメインとなるプチゼミ会と、相談事がある生徒に向けたプチ相談会という異なる2つの形式で構成することとなった。

- 用意するもの
 - － タブレット端末（学校配布、または生徒ら自身の私物）
 - － アンケートフォーム（又は用紙）
 - － 性教育の副教材や書籍など

3.4.2 生徒への情報発信（Q & A やフライヤー）

生徒との関係値の構築、並びに参加へのリマインド告知などに活用したのが Google 社が提供している、教育機関向けのプラットフォームである Classroom(クラスルーム)である。ここでは、ラポール形成の一環として、Classroom で発信し



図 3.5 会で並べる様々な本、中には借りていく生徒も

た内容の一部を掲載する。これらは全て、本研究の監督を担当する体育科の教員による代行で Classroom に掲載されたものである。また、図については、各クラスで紙媒体でも配布し、セクソロジールームの説明を行った。

3.5. セクソロジールーム: プチゼミ会 (2025 年度実施)

セクソロジールームのデザインコンセプトは先述した筆者による計7ヶ月間の性教育の講演ボランティアでのフィールドワークに基づいて設計したのち、吉祥女子高等学校での実施にあたって教員の方々にヒアリングを行い、再設計されている。会の主な対象者は生徒だが、開催にあたっては実施許可をもらう必要があったため、開催に伴う学校側の負担についても慎重に考慮した。次節より、コンセプトに至った経緯について説明する。

3.5.1 第一回目の実施

会の流れ

- グラウンドルールの配布と確認
- 自己紹介で、呼ばれたい名前やクラス、部活などを簡単に共有する

SEXUOLOGY ROOM

14:00 **【本日のプチゼミ会テーマ】**
進路ってどうやって決めたらいい?
～女性やセクマイをめぐる進学先・キャリアについて～
15:00 ※誰でも参加可能、入退室フリー、飲み物持参可

15:00 **【プチ相談会】**
先着1組のみ貸切の為、
参加希望の方は【15時時点】で
16:00 学園史料室のドアの前にいるようにしてください!

本日のセクソロジールーム
14:00～16:00 @ [redacted]

図 3.6 当日の告知

そもそも性の話ってどこまで必要？

日常の中の興味や疑問

進路や将来を考えるの難しすぎ問題

#セクマイ当事者による雑談会
セクソロジールーム

SEXOLOGY
ROOM

性にまつわる
「等身大」なあれこれ
おしゃべりする

6月開催 / 各回2部制
毎週水曜 16:00-18:00
毎週土曜 14:00-16:00
※ 6/18 を除く

第1部 (50分) プチゼミ会
テーマに沿ってわいわいおしゃべりする会。
誰でもいつでも参加OKのフリー参加制。
ゲームなど用意してます！

第2部 (50分) プチ相談会
じっくりお茶を飲みつつお話しする会。
先着順で1組までの貸切制。
ひとりでも、誰かともOKです！

○場所は後日 Classroom 等で告知します。
○開始5分前から入室 OK
○入退室フリー、飲み物持参 OK
○聞き手も大歓迎！

調査への同意、
およびアンケートにご協力お願い致します。
回答はこちらの QR コードから▶
* 調査への参加を強制するものではありません。
* 同意にあたっては研究説明書をご覧ください。

アンケート

研究説明書

図 3.7 配布、配信したチラシ

Q. 性といっても色々な変化があるような気がするけど、
人の本当のって何？
どうやって自分の「性」って確信が持てるのか？

A. その通りすぎる。確信は経験からくる部分もあるけど、
個人的には根を詰めて全てを明らかにしなくちゃいけないものでもないかなと思う。

それを感じてつかんでるのはすごい！！授業でも今後やと思います。
性って実は、すごく流動的なものであることが、近年では既に通説なんです。好きになる性が変わることも、例外的な相手を好きになることもあります。

本当の性＝唯一絶対の真実の性、というよりは、「その時自分に一番近い/しっくり来る性」くらいに考えるのが思い詰まなくて済むので良いと思います。

実際流動的なので、本当にそれくらいだと捉えるのが良いと思います。

また、これは参考ですが、ノンバイナリーの中には、ジェンダーフルイド (Gender Fluid) といって、まさに「流動的な性」として、その時のジェンダーアイデンティティに合わせて男性風や女性風を行ったり来たりするタイプの方もいらっしゃいます。

※これは一見おおらかなれを押しめたいわけのように見えますが、本人にとっては目録。
あるいは一瞬間をうしろしたことを「しるければならない」に近いです。性差の問題ではなかったりします。

図 3.8 Q & A(抜粋)



図 3.9 会の流れ

- アイスブレイクとして、セキララカードというカードを用いて引いたカードの質問に答えるというミニゲームを行う
- 参加者に見やすい状態になるよう、テーマをホワイトボードなどに書き、聞きたい内容や話したい内容についてピアエドューケーターが尋ね、それに対し生徒が答える
- 質問に対し、経験談の共有や解説を交えながら、話を掘り下げていく

3.5.2 第一回目の実施

初回は3名が参加した。会の雰囲気は明るかったが、ピアエドューケーターから話を振る際に、生徒が回答に躊躇する様子が見られた。告知の際に詳しい自己紹介などは行なっているが、生徒側はまだピアエドューケーター自身についてよく知らないと感じていること、また性についてオープンに話すという初めての機会に、遠慮や戸惑いの表情が見受けられたため、会に参加してもらう時点で、「こういう質問をしても大丈夫だ」と安心させるためのアプローチが必要であると感じた。



図 3.10 アイスブレイクで用いるセキララカード

参加生徒の感想（事後アンケートより）

「楽しくお喋りできて嬉しかった」「今日取り上げられたテーマについてまた考えてみようと思いました。また、孫さんの経験が聞けて良かったです!!」

3.5.3 第二・三回目の実施

会の流れについては、第一回と同様であるため、ここでは省略する。第二回の会では3名が参加し、1名が用事により途中退出。性的マイノリティや女性のキャリアや進路について、学部や研究室の選び方から具体的な就職先まで、進路に関する話題で盛り上がった。第三回では3名が参加。会話の様子から、お互いが仲の良い友達同士であることが伺えた。ジェンダーや性に関する様々な表現について、好きや恋愛の概念について考え直す視点を持つ内容で盛り上がった。一方で、「主催者さんが比較的沢山喋るという感じの雰囲気だったので、場合によっては生徒同士でディスカッションをする機会をもう少し増やしてみても面白いのではないかと思った。」という意見もあった。

参加後の生徒の感想（事後アンケートより）

「当事者の話を聞いたり、本音を話せたり出来てとても有意義な時間でした。」
「とても楽しかったです!」「もっと堅苦しい雰囲気を想像していたのですが、主催者さんが優しく対応してくださってとても良かったです」「なんとなく疑問に思ってたモヤモヤしていたことについて教えてもらうことができスッキリしました。また普段はあまり深く考えないことも多く話題に上がり楽しかったです。」

3.6. セクソロジールーム: プチ相談会 (2025 年度実施)

3.6.1 第一回目の実施

会の流れとしてはグラウンドルールの配布と確認、自己紹介で、呼ばれたい名前やクラス、部活などを簡単に共有し合う、話したい内容について、対話や経験

の共有を行った。第一回では、プチゼミ会に参加してくれた生徒が、そのまま相談会に参加を継続した。カミングアウトに関する相談を受け、自身の経験や周囲の経験談などを交えて対話した。参加後の生徒からは、「参考になることばかりで楽しくお喋りできて嬉しかったです。」という感想があった。

3.6.2 第二・三回目の実施

第二回の会の様子では、第一回同様、プチゼミ会に参加してくれた生徒2名がひと組として参加を継続した。最初は進路や性的指向などに関する不安や関心を、ピアエド्यूケーターを交えて話していたが、次第に参加生徒2名のやり取りが中心となっていった。ピアエド्यूケーターをその様子を見守ることに徹し、お互いに話を打ち明けあいながら、関係性を深めていく様子が見られた。第三回の会では1名が参加。これまではプチゼミ会で様子を見ながら、その後継続してプチ相談会へ参加するパターンが多かったが、プチ相談会が初参加という生徒が来てくれた。「性教育の普及や日本の現状に危機感があるけど、課題解決のために少しでも行動を起こすには、どうすればいいのか分からない。」という相談を受け、取れる行動の選択肢などのアドバイスや、そう考えるに至った動機など、お互いの話を共有しながら議論した。

参加後の生徒の感想（事後アンケートより）

「すごく楽になりました！ありがとうございました！」「とてもためになった。その道で実際に行動し、勉強している方からのアドバイスやお話を聞くことが出来て本当に良かったです。」

3.6.3 第四回目の実施

第四回は特別時間割の日程で、部活もなく早く帰る生徒が多かったにも関わらず、友人同士だという生徒二人組が部屋の外でセクソロジールームの開始を待っていてくれた。進路についてどのように考えたら良いか分からない、他の人はど



図 3.11 第四回の会の様子

うしてるんだろうといった話題から始まり、大学を選ぶ際のポイントや専攻などの話が広がった。途中からジェンダーに関するドラマやアニメの表象の話題に移り変わり、エンタメで描かれる様々な性を糸口に、性の多様性について話し合った。2人はそのまま相談会の方へと継続参加し、性的マイノリティである友人を無意識に傷つけないためにどんなことに気をつけたら良いか、また同級生との人間関係についてなど、話が多岐に広がった回だった。

参加後の生徒の感想（事後アンケートより）

「とても面白かったです。自分の捉え方を少し変えるだけで自分も相手も楽しくなれる方法があるとしれて、心が軽くなりました。」「テーマに沿って意見を交換できて、考えの幅が広がったのと、自分の意見を整理することができてよかった。」「ためになったし、スッキリしました。性についてあらためて、知れた情報もあったとともに、性について知ることは、大事だと思いました。」

第 4 章

価値検証

4.1. 検証方法

本研究の目的は、セクソロジールームが性を学ぶ上で、SNS を含むインターネットや授業とは異なる受け皿としての機能性を検証することにある。その実証にあたってはセクソロジールームが「性に関する対話を促す場所」として適切な機能を有しているかどうか、及び生徒のニーズに応えられているかどうか、この2点を軸に検証する。「対話を促せる場所であったか否か」に関しては、レイ・オルデンバーグが提唱したサード・プレイスの8つの要素に照らしあわせ、その要件を満たしているかを検証する。また、性を扱う場であるという特性から Arao ら (2013) が提唱する5つの「共通規範」の観点を基準に、場の安全性や対話についても評価を行う。続いて、筆者自身の参与観察及び生徒によるアンケート回答、教員のインタビューに基づくフィードバックから、ニーズに対応しうる場としての価値が提供できていたかを明らかにする。これらの検証を通じ、セクソロジールームがK校に所属する生徒らに対して、「性に関する対話を促す場所」として適切な機能を有しているかどうか、及び教育現場における有用性に焦点を当てて分析し、性教育の分野において有用なアプローチとなりうるか、総合的に評価する。

4.2. 空間機能性評価

セクソロジールームでは性に対話することに伴う緊張感を和らげ、心理的安全性の高い場を提供するために、設計でサードプレイスの要素を取り入れている。それぞれ8つの要素の観点から、サードプレイスとして適切な環境であったかを

判断するにあたり、生徒からのアンケート回答、そして筆者自身の参与観察に基づいて評価する。

4.2.1 参加生徒からのフィードバック

第3章で詳述したとおり、セクソロジールームではテーマは決まっているが自由に参加できる「プチゼミ会」、1回1組限定でテーマを問わず相談できる「プチ相談会」の2つのパートによって構成されている。プチゼミ会では9名中6名からの回答が、プチ相談会では4名中3名からの回答が得られた。それぞれの回答結果は以下の通りである。（なお、回答については生徒による自由意志の下行われており、生徒に対し個別のインタビューは行なっていないため、未回答の理由について詳細は不明である。）

上記の通り、セクソロジールームにおける雰囲気や居心地に関して、基本的に良い状態であることを示す回答が得られた。中には図??内のように、1件「悪い」という回答も見られた。一方で、その回答を選択した理由として「参加人数が思ったより少ないことに少し驚きましたが、何でも話せる雰囲気があって良いと思いました。」という記述があった。この内容では雰囲気等が良くないという回答の明確な理由についてはわからないが、「何でも話せる雰囲気」という記述があることから、セクソロジールームにおいて一定上の雰囲気の維持は果たせていたと推測する。

4.2.2 サードプレイスとしての機能性評価

上記の生徒からのフィードバックに加え、ピアエデュケーターとしてのセクソロジールーム内での参与観察を通じた結果、サードプレイスにおける8つの要素に基づく評価は次の通りである。

1. ニュートラル・グラウンド（中立の領域であること）

セクソロジールームは学校内に存在しており、厳密には学校に所属する機関ではない。学校側から許諾を受けて開催する以上ステークホルダーとの関係

5-1) 会の雰囲気等に関して、自身が感じたものと最も近いものに○をつけてください。

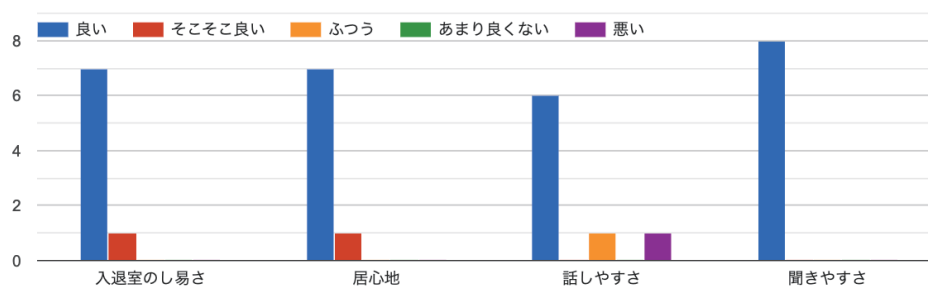


図 4.1 会の雰囲気に関する参加者の回答（プチゼミ会）

5-1) 会の雰囲気等に関して、自身が感じたものと最も近いものに○をつけてください。

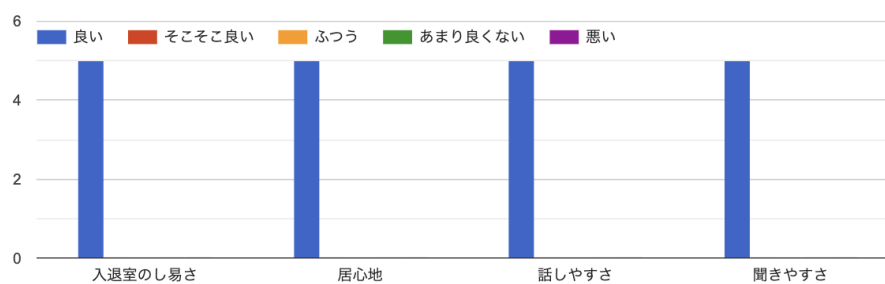


図 4.2 会の雰囲気に関する参加者の回答（プチ相談会）

表 4.1 プチゼミ会での会の雰囲気についての回答選択理由

生徒	理由
生徒 A	色々な概念を知れたから
生徒 B	雰囲気がすごくあたたかくて素敵でした！
生徒 C	主催者さんが優しくかったから。お菓子が用意されていたから。
生徒 D	人数が少なかったので話しやすい環境だったのですがどんなことを話したら良いのか少し考えてしまいました。でも自分の気になることについて質問できたので良かったです！
生徒 E	参加人数が思ったより少ないことに少し驚きましたが、何でも話せる雰囲気があって良いと思いました。
生徒 F	先生(※)が気軽に話しかけてくださった他、授業とは違うアットホームな雰囲気(?)が良かったです。(※ここではK校の教職員ではなく、ピアエデュケーターを務める研究者自身を指している。)

表 4.2 プチ相談会での会の雰囲気についての回答選択理由

生徒	理由
生徒 a	本当に過ごしやすく、割と自分の本心とかありのままが出せてリラックスできたから。
生徒 b	話してて楽しかったから
生徒 c	とても話しやすかったため。

性については考慮する必要があるものの、あくまで安全上の管理としての側面が強い。また、教職員及び生徒と明確な利害関係を持たないピアエデュケーターの存在が、より非学校的空間としての側面を強化する。

2. 平等性

ピアエデュケーターも含め、参加者は全てが対等な存在である。参加者同士は呼ばれたい名前で呼び合い、ワークショップ中は敬語を使わず対話することも可能である。しかしながら、生徒や卒業生、時に教員といった様々な属性や年齢層、肩書きを持つ参加者が集まる際、まったくの対等というのは現実的には難しく、少なからず権力の勾配性などが生じる。セクソロジールームではそうした不均衡のバランスを一時的にでも対等に近づけるため、グラウンドルールとセキララカードによる自己開示を目的としたアイスブレイクという2つのステップを参加者全員が行うことで平等性を担保している。

3. 目立たない存在

セクソロジールームはK校内の一室を借りて放課後に開催されている。開催場所は基本的に学校側の都合に依存するため専用の空間を設けているわけではないが、授業を行う教室とは離れた棟での開催が多く、放課後のため生徒や教員の交通量は少ない環境である。そのため、生徒は過度な注目を浴びることなくセクソロジールームに参加することができる。

4. 利便性と利用しやすさ

学校内で開催されていることから、金銭的なハードルや距離的なハードルもなく、すぐにアクセスすることが可能である。また、部活動や習い事、塾などの多忙な高校生のスケジュールを考慮し、参加機会が限定されすぎないよう毎週水曜と土曜の放課後にルームを開催している。Classroomなどを活用し、会の様子の発信を行ったり、明るい雰囲気的空間を作ることで初めて来訪する人にとっても入室しやすい環境を整えている。実際にプチゼミ会に参加した生徒の中で、「お菓子があるっていうし、暇だったから、参加しにいく友達にそのままついてきました！」という声が複数あったことから、利用しやすさという要素を満たしていると考えられる。

5. 主な活動が会話であること

プチゼミ会ではテーマに添ってディスカッションや会話、様々な質問を含めて対話が行われる。性を主軸にした対話にあたり、場で守るべきルールは常に共有され、参加者は任意のタイミングで対話に参加、または不参加を選択することが可能である。参加生徒の性格や目的によってはピアエドьюケーターが中心となって話す回もあったが、そういった場合は意識的に各参加者へ質問を回すことで対応する。一方、プチ相談会では参加生徒1名とピアエドьюケーターで対話することが多い。基本的には対話を通して知識の共有や、生徒自身が持つ悩みを打ち明けるなどの様々な相談が行われる。プチ相談会は1組であれば複数の生徒の参加が可能だが、その中で特に印象的だった回を取り上げる。友人同士で参加してくれたある生徒らは、始めはピアエドьюケーターである研究者自身に性に関する悩みや進路の話をしていたが、話が深まる中で、やがて互いに誰にも話したことの無い内容を打ち明けあうという出来事があった。こうしたことから、セクソロジールームは名実ともに対話を主軸とした空間であると言えるだろう。

6. 常連の存在

セクソロジールームでは、オーガナイザーであり、ファシリテーターでもあるピアエドьюケーターが常駐している。「常連」として、会のルールを伝え、初めての来訪者にも話や質問を回すことでスムーズな対話の循環と快適な空間作りに努めている。また、参加生徒の同意があれば教職員も参加が可能であり、実際に時折教員が業務の合間を縫って参加してくれるケースもあった。このように、セクソロジールームは性について対話したいと考える人々を属性を問うことなく迎え入れる場所である。

7. 遊び心のある雰囲気授業と異なり雑談会では飲食可能であること、またカードゲームや書籍といった遊び心や好奇心を刺激するアイテムが置かれている。実際にプレイや関心のある本の貸し出しなど通して、生徒にとってリラックスしやすい状態が演出されている。

8. 第二の家（居心地の良さ）セクソロジールームでは、過ごし方の指定は無

い。参加者には、グラウンドルールからの逸脱や他者に危害を加えるといった行為が無い限り、自由に過ごすことのできる雑談会であると事前に伝えている。このように伝えることで、参加者の精神的/心理的な負担を軽減し、リラックスしやすい環境が整えられている。実際に図のアンケートや、自由記述の感想からも居心地に関する肯定的なフィードバックが寄せられていることから、居心地についても要素を充分満たしている。

4.3. ブレイブスペースとしての機能性評価

安全な性の対話を行うために必要な、ブレイブスペースとして5つの要素と、セクソロジールームでそれらが満たされていたかの評価について、筆者による参与観察と上記の生徒によるフィードバックを交えて評価する。

1. 意見が異なることへの同意

グラウンドルールを最初に確認することから始まるセクソロジールームでは、「様々な人がいることを想像する」ということを念押ししている。実際の対話の中でも、様々な意見や質問が飛び出す中で、それらを否定するような意見が出ることはなかった。継続していく場合や、参加生徒によってはそういった場面が出てくることもありうるが、グラウンドルールを順守するという共通認識が参加者間で働いている以上、空間として意見の相違への同意が取れていると判断できる。

2. (会での内容を) 個人的な内容として受け取らない

誰かが発した意見を、自分への指摘のように感じたりすることを完全に防げるわけではない。だが、K校の特色かもしれないが、生徒らの反応を見ると、「どうしたら同級生や友人に受け取らせないように性に関する意見を伝えるか」という点に関心のある生徒が多かったため、場を管理するピアエデュケーターとしては「受け取らせないよう」なコミュニケーションのやり方を示すように徹底した。例えば「私の場合」「自分個人の考えだけど」といったようなエクスキューズを用いて、自身を主語にして経験や考えを伝え

るように努めることで、実際に、過度に参加者の属性を巻き込むような話題が広がらないようにしていた。仮に「受け取らない」ことができていなければ、参加者らは心理的安全性を担保することができず、対話を行うことが難しい状況になってしまうと推測できる。逆説的に、「受け取りすぎる必要はない」ということが認知された空間を維持できたことが、アンケート結果で示されているような居心地の良さにつながったと言える。

3. 「挑戦」は自分の選択の範囲で行う

グラウンドルールにはこういった内容を明示的に盛り込んではいないが、「話したくないことは話さなくてもいい」という項目を記載している。また、何か生徒本人にとって言いにくい相談や悩みを話そうとしている時にも、改めて「話せる範囲で大丈夫だよ」「話しやすいところからでいいよ」と伝えている。生徒側がこうした対話のアクションを取れるか難しい可能性がある場合には、こちらから念押しをすることで、こうした要素を満たす対話空間を形成する。

4. 場にいる相手への尊敬 (尊重)

こちらもグラウンドルールで明示することで、参加者はそれを順守していた。プチゼミ会では、仲の良い友達同士での参加だけではなく、顔見知り程度の同級生と同席した回も複数あったが、いずれの場合も対話における相手への尊重があった。

5. 攻撃の禁止

1～4で既に述べた通り、参加者らとピアエデュケーターとで尊重しあう対話の場が持たれ、身体的または心理的な攻撃行為はなかった。

6. 自身が無自覚に差別をしまうことを念頭におく

セクソロジールームでしばしば聞かれて印象的だったのは、「こういうことを言ったり、聞いたりすることはあまり良くないと思うんだけど…」という前置きの元、生徒ら自身が持っている偏見や差別的な視点につながりうる疑問について聞かれたことである。このような前置きをするということは、

生徒自身は「これが差別や偏見を含む内容である」ということを自覚しているという現れだとも言える。グラウンドルールでも、安易な決めつけを抑えるようにという記載があることで、一定の抑止力が機能していると同時に、生徒らは偏見の善悪などの区別がつかない年代でもある。誰しも自然と差別につながるような偏見を持ちうるのだ、ということを開始時にも共有する。生徒が発した「良くない」疑問は、差別をしうる自分の認識を改めるためにぶつけてくれたようでもあった。こうしたやり取りがしばしばあったことから、セクソロジールームでは無自覚な差別意識に向き合う対話空間がもたらされていたと推測できる。

4.4. ピアエデュケーターの立ち位置と役割

参与観察から得た知見を中心に、セクソロジールームにおけるピアエデュケーターの立ち位置と役割について述べる。

ピアエデュケーターは、被教育者である生徒にとって身近な属性を持つ存在であり、生徒らにとっては精度の高い社会のレビュアー、かつロールモデルとしての役割を持つ。また、教職員や生徒と直接的な利害関係を持たない外部の人間であるため、生徒や、時に教職員に対しても中立性を保持している。こうした「身近な対話相手」として、そして参加者の安全のためにセクソロジールームを維持管理するファシリテーターとして、この研究で求められるピアエデュケーターの資質は、大きく3つの観点に整理できる。

まず、peer=仲間である要素を持っていること。これは、本研究における筆者の場合では、K校の卒業生であること、そして大学院性という中間的な立場、かつ性的マイノリティの当事者であるということが当てはまる。

そして、参加者に対する姿勢として、知ったかぶりをせず、常に柔軟な考えを持つこと。授業では常に正解あるいは不正解ではない内容を教わるが、性教育においてはニュースや社会の変化が絶え間なく、明確な正解を持つものはごく一部である。そうしたトピックを語る場において、参加者との信頼性を築く上では、正しさよりも間違った時にどうするか、常に変化する社会や性にどのように向き

合うのかといったスタンスが重要となってくる。

最後に「中立性の維持」として、差別的な内容を除き、正解や不正解を一方的に判断せず、公平な立場を保つことが重視される。そうした見極めを行うためにも、生徒の様々なニーズに応えられる専門知識や十分なファシリテーション能力が不可欠となる。

4.5. 教育現場におけるセクソロジールームの有用性

4.5.1 参加生徒の評価及び参与観察に基づく評価

生徒からのフィードバックはほとんど良好と言って良い反応が得られた。学年を対象にした事前アンケートでは、「性について知りたいこと、または誰かに聞きたい、話したいこと」という自由記述の項目では、168 件中 48 件と、全体回答の 30 % 近くを占める数のコメントが寄せられている。また、相手の有無を問わず性についてあまり話す機会がないという層も 80 % 以上にのぼる。こうした回答結果から、K 校では性教育カリキュラムそのものは充実しているが、疑問や悩みがあったとしても周囲で話すことは少なく、それらを解消できる場がないという実態が浮かび上がる。

ある回のプチ相談会では「カミングアウトをしたいけど、相手にどのように話したらよいか分からない。こういう反応をされたらと思うと怖い。」という相談が寄せられた。こうした個々の生徒の悩みや疑問に、授業では対応することが難しい。たとえ充実した性教育カリキュラムに基づいた授業があっても、授業そのものはあくまで基礎知識を身につけることを目的としており、生徒の問題を解決するものではないためだ。また、別の回（プチゼミ会）では、直近の授業のカリキュラムで履修済みの内容である、性的マイノリティに関する概念について扱った。対話の中で「ここは確か授業でやったんだよね？」と確認すると、生徒によっては曖昧であったり、覚えていないという反応もしばしばあった。しかし、対話の中で掘り下げたり、生徒の質問に答えていくと、それらが納得感のある表情や、対話が盛り上がるといった変化が見られた。

実際にセクソロジールームに参加した生徒からは、「もっとこういう話を聞ける機会がほしい。」「会に参加してみて、周りの話を聞いたことで、自分の中での考えがまとまった。」「性に関する悩みや相談を初めて話せた。」「授業とは違う感じで相談や掘り下げができて楽しかった。」という声が会の中で自然と出てきた。

以上のことから、セクソロジールームでは授業と異なり、ピアエデュケーターと参加者が、個々の生徒の状況に応じた知識の共有や対話の時間を持つことで、様々な性にまつわる学びや疑問に関して、授業ではカバーしきれない部分の受け皿としての有用性を持つと言える。

4.5.2 教員のインタビューに基づく有用性の評価

教育現場における有用性を客観的に評価するため、K校に長年設けられている性教育委員会に所属する4名の教員に半構造化インタビューによる調査を行い、性教育に対して教員という立場から感じていることや、セクソロジールームの取り組みについても様々な意見を伺うことで、教育現場における有用性について検証する。

ここでの「委員会」とは、教員のみで構成されるもので、K校では毎年教員らが持ち回りで担当しており、どの委員会をどの教員が担当するかはランダムに決定される。性教育委員会もそういった枠組みの一つである。

ここでインタビューに答えていただいた教員の方々は、2025年度時点でK校の性教育委員会に所属しており、それぞれが社会/体育/家庭科/生物を担当している。また、全員がそれぞれの担当科目の視点から、授業で性について取り上げた経験を持つ。これはK校の中高6年を通じた性教育カリキュラムの方針に基づくものである。ここではこのインタビューを通じて、教育現場におけるセクソロジールームの有用性について紐解く。なお、半構造化インタビューでは、大まかに以下の内容を下敷きにインタビューを行なっている。

- 性教育についてどのような認識を持っている、またはいたか
- 性教育に関する課題や、難しさなどを感じることはあるか

- 実際に学校現場において、性に関してどのように生徒に伝えているか
- K 校の性教育の詳細について
- 教育現場で性教育がどのようになったらよいか
- セクソロジールームのような取り組みに対してどう感じるか

教員 C（社会科・男性）K 校勤務歴 10 年

「22 年教員生活を送っているが、K 校に来てから、人生で初めてというレベルで性教育について知り、取り組むようになった。」「K 校の生徒は性教育への関心が高く、発表から何かを得ようとするハングリーさがある。他の学校ではそういった風景を見たことが無いし、そのハングリーさに何より驚かされる。」「ただ性教育に関しては立場上、先生から生徒に対する踏み込まずさ？踏み込めなさがある。それは間違いなくそう。…うん、それは逆（の立場）でも同じだと思う。」「性教育を生きた知識としてどう教えるかは本当に難しい。どうすればいいんだろうな～。興味の先、行動にどう（アプローチ）するかってところだよな。難しい。少なくとも、現状の K 校での性教育だと個のニーズに対応する受け皿？みたいなものはないよね。授業というやり方には限界があるのは確か。」

教員 D（体育科・女性）K 校勤務歴 19 年

「K 校に来るまで、性教育を受けたなという記憶は（学生時代を遡っても）ない。ただ就職前に、勤務先が K 校だと大学の教授に報告した時、『あそこは性教育の学校だから』と言われて初めてそうなんだ、と知った。実際に来てからは、性教育の充実ぶりに衝撃を受けた。」「自分は性教育を受けた世代じゃないけど、生徒に伝える時は、そういう矛盾も含めて自分なりのリアルな伝え方を心がけているかな。」「ただ出産などの生殖や医学に関わる部分はパターンが決まっているけど、ジェンダーとかは（内容が）本当に色々ある。事実は事実だけど、押し付けや強制、差別にならないように気をつけてる。生徒にはそれぞれ色んな考えがあるから、それを忘れないようにしたい。」「たとえ学んだ知識そのものは忘れてし

まっても、ここに戻ってくればどうにかなるかも、頼れるかも、というきっかけの場所になるといい、と思ってやってる。」「それでも授業の中で全てを解決することはできないし、逆に授業で学んだことによって悩む子も出てくる。『正しい知識は教えるけど、その先は各自で考えてね！』が授業だから。」「個人個人を汲み取る場の選択肢が少しでも多くあることは、間違いなく大事だと思う。」

教員 E（生物科・男性）K 校勤務歴 13 年目

「学生時代は性教育を受けたな～という実感はない。実際に性教育との関わりが増えたのは K 校に入ってから。〇〇さん（＝筆者）のように性教育に熱心な人と比べると、正直なところ、自分は目の前のことで精一杯なことも多い。」「生物を担当しているが、個人的には性についての授業も変わらず、社会のつながりの延長線上、あくまでも生命の一環として捉えて、生徒に伝えるようにしている。」「よく性の多様性って（いう話に）なるけど、要するに生き物はそもそも色々で多様だよね、という感覚に目を向けてほしいな～と思う。」「こういう取り組み（＝セクソロジールーム）で、生き物の性について正しい理解が広がってほしいなと思う。」

教員 F（家庭科・女性）K 校勤務歴 4 年目

「私自身も性教育を学生時代に受けたことがなくて。高 2 の家庭科を担当してるけど、高 1 でもう性教育をやっていることもあって、生徒はすごくオープンで、授業で扱う SOGI について事前に知ってる子もいます。」「担当科目の関係で、夫婦別姓や家事の分担など性的役割分担について伝えることが多く、教員になりたての頃こそ『こういうものを（教員が）はっきり伝えても大丈夫？』と思ったけど、今は生徒の勢いに負けないよう、遠慮せずに伝えるようにしていますが…。」「ただ、それでも伝え方は今でも悩んでしまいますよね。教員としては、生徒らに卒業後に希望を持ってほしいという気持ちがあって、（社会の）実情を伝えにくい。」「生徒って、放課後何もない子は今、なるべく早く帰されちゃうんですよね。セクソロジールームのような取り組みがあると、生徒は学校で話す時間や大義名分がで

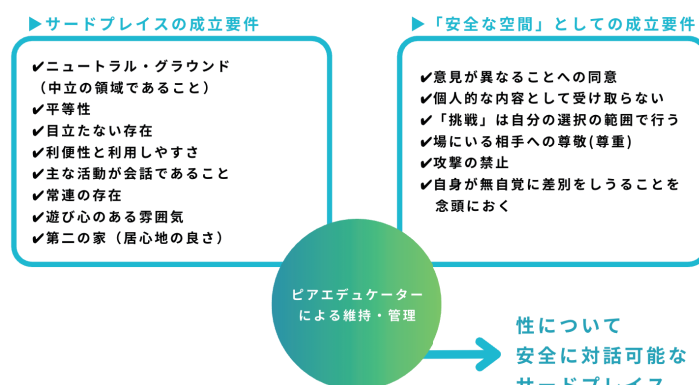


図 4.3 セクソロジールームの成立要件の図式

きるし、外部の方との方がこういう内容（性について）は、生徒たちも話しやすいんじゃないかな。」

これらの語りから、教員からも授業という形式に頼った性教育機会の限界が示唆されている。とりわけインタビュー内でも言及されていた、「教員と生徒という関係性故の踏み込めなさ」「教員の業務の中ではカバーしきれない、個々の生徒が抱える悩みや疑問といったニーズ」において、機能性評価からも分かるように、セクソロジールームは対応力を持っている。このような教員からのレビューを踏まえると、セクソロジールームは授業では拾いきれない個々の悩みや関心に寄り添うことのできる「多様な性の学びの受け皿」としての有用性があるといえる。

4.6. セクソロジールームの成立要件

セクソロジールームが、「性について安全に対話可能なサードプレイス」として、その役割を十分に成立させる要件としては、サードプレイス並びにブレイブスペースの要素を満たすことで、対話を行う上での心理的・構造的安全性の確保と、それらをコントロールする立場であり、身近なロールモデルでもあるピアエデュケーターの存在という2つの柱が明確に位置づけられる。

この要件を満たしセクソロジールームとしての機能することで、第3の教育機会として授業を掘り下げた内容やピアエデュケーターを含む他者との交流体験を

提供し、従来の教育方式では届きにくい、生徒たちへの個別のニーズへの受け皿としての価値が生まれる。

第 5 章

結

論

5.1. セクソロジールームの意義

1. ロールモデル兼レビュー提供者としてのピアエデュケーターの存在

セクソロジールームにおいて特に重要なのは、ピアエデュケーターの存在である。彼らは生徒にとって「身近に感じられる教育者」とであると同時に、社会について鮮度や信頼性の高い情報を共有できるレビュアーであり、性に関するリスクや困難を経験したリアルな語りを持つ、信頼できるロールモデルでもある。こうした存在は、生徒にとって新たな価値観との出会いや学びを深める貴重な機会を提供する。

2. 学校において上下関係を持たない相手との対話ニーズへの対応

学校では、教師や先輩後輩といった強い上下関係がしばしば存在する。セクソロジールームでは、そうした上下関係に縛られない、程よい距離感を持つ対話相手としてピアエデュケーターが機能する。安全でフラットな関係性のもとで対話できることで、生徒が安心して相談や質問をしやすい環境が整えられる。

3. 細分化している「性」トピックへの関心に対し、リアルタイムで対応

授業では網羅しきれない個別の「性にまつわる関心」に、セクソロジールームはリアルタイムで柔軟に対応する。雑談形式の対話を取り入れることで、生徒は自発的に質問や意見を交わし、気軽でありながら深い学びを得ることが可能となる。これは、従来のカリキュラム中心の性教育を補完する有効なアプローチでもある。

4. 他者との新たな交流を生む場として

セクソロジールームは、教員やクラスメイト、ピアエデュケーターなど、多様な人々との新しい交流を生み出す場としての役割を果たす。授業や休み時間とは異なる環境で対話を行うことで、生徒は等身大の視点から他者とつながり、閉鎖的になりがちな学校生活に「開かれた対話の場」を提供する。この取り組みは、性教育を「共に考える場」として再構築するうえでも大きな価値を持つ。

このように、セクソロジールームは、学校内における上下関係やカリキュラムに基づく形式的な学習環境とは異なり、自由かつ安全に性に関する対話を行うための補完的教育空間として機能する。その中心的要素であるピアエデュケーターは、利害関係のない第三者として、生徒が日常的には語りにくい話題を率直に共有できる相手としての役割を果たす。また、セクソロジールームは規定こそないものの、基本的に少人数の空間であることから、授業で十分に扱いきれない細分化された性のトピックにも柔軟に応答し、生徒の未解決な疑問や不完全燃焼な事柄をリアルタイムに解消する機会を提供する。さらに、雑談的な交流を通じて、教師や友人とは異なる適度な距離感をもつ対話が可能となり、ピアエデュケーターのみならず、生徒同士の間でも新たな関係性が形成される可能性を持っている。性という一見語りにくそうな話題は、他方で同じ悩みや疑問を抱えていたり、理解があると認識すると、時に日常的な立場や線引きを超えて、新たな繋がりをもたらすこともある。性を安全に語れる場と、学校外の人間であるピアエデュケーターという掛け合わせによって、セクソロジールームは一時的に日常的な立場や線引きを越境しうる空間となり、新たな繋がりや学びを共創する場として、教育現場においてその意義を有する。

5.2. セクソロジールームの持続可能性、並びに他校での汎用可能性

ここからは「授業とは異なる性教育の機会と体験を提供する」という目的を継続的に達成するにあたって、その持続可能性などについて詳細に言及する。

5.2.1 K 校における持続可能性

- 維持に必要なリソースについて

リソース不足問題に取り組みながら性教育の機会増加を図ることは、本研究のねらいの一つである。今後の開催にあたっては、継続協力に関して、学校上層部も含めた現場の理解を得られるかが課題となる。学校側の負担を最小限にするため、オーガナイザーである研究者自身で運営や開催準備を行ったが、それ以外にも現在の形式でのセクソロジールーム開催には場所の確保、並びに安全性の観点から監督役を務める教員が必要である。今後の開催にあたっては、継続協力に関して学校上層部も含めた現場の理解を得られるかが課題となる。

- 監督役となる教職員の存在

特に実施にあたり、監督役は長年性教育担当している体育科のベテラン教員 A さんに監督協力をお願いしていた。今後も継続する場合、同じ教員の方が監督役を負担し続けるのではなく、他の体育科教員の方々の協力を得るなどで、監督役を分散させることで負担の偏りを避ける。その場合、セクソロジールームで得られた反響やメリットについて、明確に学校側と共有することで継続協力を交渉できる可能性がある。しかしながら、教員がセクソロジールームに同席する場合、少なからず来訪した生徒が性について話しにくくなる恐れなどの影響については考慮する必要がある。こうした場合、生徒と信頼関係を築けている教員との連携や、生徒の状態に合わせて教員が距離を取るなどの対応が望ましいケースがあることは明記しておく。

- 開催スペースの確保

K 校では部や同好会の増加に伴い、校内での定期的な個室空間を確保することが難しくなっている。そうした状況を踏まえて、セクソロジールームは学

校の公式活動ではなく雑談会であり、かつ生徒が快適に過ごせる場所であることが条件であるため、場所の確保については個室に限らず食堂や校内のオープンスペースなどの活用を視野に入れた提案や、開催頻度を調節することで個室の確保をしやすいとするといった調整が可能であると考えられる。

- 他学年の生徒の参加可能性

今回の対象者が高校1年次の生徒を対象としているのは、K校における性教育カリキュラムの受講年次に該当しているためであり、セクソロジールームの内容の一部でカリキュラムを取り扱う、という背景が存在する。だが性教育の意義に立ち戻った際、また雑談会という形式である以上、本来ならば学年を問わず自由な参加が認められるべきである。しかしながら、参加者が複数の学年に跨った状態は、対話における検討事項が非常に多岐に渡るため、性に関する安全な雑談の場を維持するにはあまり適した環境ではないと考える。特に、参加生徒の所属する部活動によっては学年ごとに厳しい上下関係が存在する場合もあり、セクソロジールーム内で求められる「対等な関係」というのが物理的に成立しにくい。また、そうした上下関係が、雑談会で行われる対話の流動性を阻害し、対話の膠着性を高めてしまう恐れもある。実際に、この点においては、現場の教員からもコントロールが難しいという声が聞かれた。参加生徒の学年を問わない参加の可能性について検討する場合、学年ごとに回を区切って複数回での開催、または他学年の参加は見学のみ限定するなど、ある程度ピアエデュケーターがコントロールしやすい環境に整えるやり方を検討する必要がある。

5.2.2 その他の学校現場における実施可能性

これまで述べてきたように、セクソロジールームのコンセプトや内容は非常にシンプルであり、フレキシブルな状況に対応できるよう構成されている。しかしながら、その実施にあたって最も大きな壁となるのは学校で開催するための許諾をいかにして取るかという点だろう。

学校内でセクソロジールームに類する試みを行うには、当然ながら学校現場における意思決定層による許可が必須となるが、意思決定層は世代的に性教育の被教育経験が薄く、また男性であるケースが多い。男性は女性と比較して性教育を受けないことによって被る社会的リスクが低く、その必要性を感じにくいいため、リソースについて交渉するにあたってはそれらを考慮する必要もある。本研究を実行するにあたって複数の学校を訪問してセクソロジールームの企画を持ちかけたが、性教育について手薄な学校では、やはり許可を取るための土壌が整っていないという問題が立ち塞がった。では性教育に力を入れている学校ではそうした問題がないかと言われればそうではなく、今回協力いただいたK校ではリソース不足の問題がネックであったし、他校と比較すると性教育が充実している環境ではあったものの、だからこそ学校からは「カリキュラム以外で、性について対話をする機会が更に必要なのか」という批判的な声も聞かれた。こうした背景からも、他校と比較してセクソロジールームを開催するために特別な好条件が揃っていたわけではない。

こうした問題を踏まえてリソースを確保する、あるいはそうした環境に近づけるためにはどうしたら良いか。対応策の一部として、以下2点を取り上げる。

- 外部団体による性教育講演の活用

これは特に、性教育に物理的リソースをかけられていない学校にとって有効である。規定のカリキュラムの中で時間を取る必要はあるが、人的リソースの確保や内容を検討する手間を大幅に省くことができ、継続についても反響や予算を考慮しながら、フレキシブルに対応できる。こうした点から実施のハードルが低く、挑戦しやすい。校内での理解者を増やし、生徒からの反響を確認する上でも、有効な方法である。こうした手段から学校内で性教育に対する賛同者を増やすことで、セクソロジールームのような試みを行うという流れを作ることができる。

- 保護者や教員にとってメリットを感じやすい内容を提案する

今回のセクソロジールームではこちらの方法をとった。吉祥女子の場合、意思決定層にとっての懸念事項は保護者や教員に対する説明責任や、それらを負うだけのメリットがあるか否か、ということだった。本ケースでは意思決

定層との面談の結果、保護者の反応や生徒に対する SNS の及ぼす悪影響について特に懸念されているということだったので、それらの点にフォーカスした提案を行なった。また、現行の性教育にも不足している部分があると伝えるうえで、統計のみならず様々な卒業生の声を取り上げることで説得力を持たせた。セクソロジールームの主軸はあくまでも性にまつわる雑談会であるため、その内容に関して特別な規定はない。このように、実施したい学校の意思決定層や保護者といったステークホルダーが重視する内容に合わせた提案を行うことで、実施許可を取りやすくなるのではないかと考えられる。ただこの場合、生徒側のニーズに対応する前に許諾を取らなくてはならない場合もあるため、本来の対象者である生徒のニーズから乖離しすぎないよう、あらかじめ幅を持たせた提案内容にすることを推奨したい。

このように、セクソロジールームの許諾をとるにあたっては、その根底にある性教育への偏見や誤解が問題により拍車をかける場合も多い。しかし逆にいえばこれらをクリアさえすれば、十分な性教育カリキュラムを実施していない学校でも、カリキュラムの実行よりも少ないリソースで、生徒らが時事的かつポジティブに、性に触れる機会を増やすことが可能となるだろう。

5.3. 今後の課題

5.3.1 ピアエデュケーターの人材確保

ピアエデュケーターを誰が担うのか、という点において、属人化の問題は切っても切り離すことができない。しかしながら、性的マイノリティの当事者団体や、性教育に関わる大学生～社会人が所属する団体は少なくなく、そうした団体と連携を取ることで、人材確保や属人化に伴う懸念はある程度解消できると考えられる。団体を選ぶ際には、講演実績や組織背景、性教育に関するファシリテーション研修の有無などが現実的な選定基準となるだろう。筆者自身が所属する NPO 法人においても、ボランティア活動には研修および組織内試験の合格が必須条件であり、実際に学校側にそうした経験があることを事前に伝えている。団体を選ぶ

上でも勿論のこと、ピアエデュケーターとしての知識や経験を求める人にとってもこうした仕組みが参考になれば幸いである。

さらに、昨今では教育関係者による性加害問題が報道されており、セクソロジールームのような取り組みがグルーミング（性的手なづけ）の場とならぬよう、外部団体や学校組織との連携の中で監視の目を持つことも安全管理の上で重要である。このような場を継続するにあたっては、性に関わる内容ゆえに精神的な負担が生じやすく、1人で運営を続けることは長期的に難しい。本研究はあくまで最小人数による実施例として成立しており、頻度や開催時期、実施人数についてはそれぞれのケースに応じた対応が求められる。

参考までに、本研究における筆者がピアとして持つ属性は、生徒と同じ学校の卒業生であること、そして教員よりも生徒に近い年齢である点であると考えられる。また、一部の生徒にとってはセクシャルマイノリティであることも含まれるかもしれない。実際に個人でセクソロジールームを実施するにあたって、エデュケーターとしての適性については講演ボランティアの経験などから学校側に提示した。

5.3.2 ピアエデュケーターの精神衛生に関する注意喚起

属人化の問題とも繋がるが、こうした活動を行なっている団体や、性的マイノリティを含む性の経験の当事者らと連携してセクソロジールームの取り組みを行う場合、なるべく複数人で継続できることが望ましい。先に書いたようにグルーミングを防止するだけでなく、自身をモデルケースとして性教育の現場に関わることは、時に諸刃の剣となる。自ら「矢面に立つ」ことを選択していてもなお、精神的な負担を考慮すると、ルームの開催頻度や複数人のピアエデュケーターが関わることで、負担を分散させる必要性があることは認識しておきたい。本研究ではフィールドワーク先の学校側の希望もあり、筆者1人がピアエデュケーターの役割を担うことで最小人数によるセクソロジールームの運営を行なった。しかし、頻度や継続性の観点について考慮するのであれば、やはり民間の団体との連携が不可欠となってくるだろう。

5.4. 総括

セクソロジールームの開催にあたっては、授業とは異なる形式による反響や、性について安全に語ることで、新鮮な体験を生徒らや教員にもたらしることができる。しかしながら、学校現場での継続的な実施にあたってはリソース不足の問題に対する懸念は拭えず、また他の現場では性教育に対する偏見などが実施の障壁となりうる可能性もあり、それぞれ個々のケースに合わせた対応をするしかないこともまた事実である。しかし一方で、学校側への交渉やピアエデュケーターの確保といった課題については、例示したような対応次第で実現や実施に向けて前進することは充分可能である。

5.5. 展望

セクソロジールームという取り組みは、授業と比較して物理的なリソースを抑えつつも、性教育ギャップを軽減し、性にまつわる学びを求める生徒に対する機会創出を実現している。その低コストさ故にピアエデュケーターをいかに確保するかといった点など、全ての教育現場にとって容易に実現可能な策であるとは言いが、日本における性教育の普及の拙速さは深刻な問題である。

単に「生徒にとって良い性教育の機会」というだけにとどまらず、こうした取り組みの認知や実施が広がることで、本格的な性教育の拡充には多大なコストが必要であるという認識が変わり、様々な教育現場で「低いハードルからでも包括的性教育（に繋がる取り組み）を始める」という芽のきっかけになれば幸甚である。

セクソロジールームという取り組みは、授業と比較して物理的なリソースを抑えつつも、性教育ギャップを軽減し、性にまつわる学びを求める生徒に対する機会創出を実現している。その低コストさ故にピアエデュケーターをいかに確保するかといった点など、全ての教育現場にとって容易に実現可能な策であるとは言いが、日本における性教育の普及の拙速さは深刻な問題である。

こうした取り組みの認知や、あるいは実施する学校が広がることで、「本格的な性教育の拡充には多大なコストが必要だ」という認識が変わり、様々な教育現場

で、「まずは低いハードルからでも包括的性教育を始める」という芽が広がるきっかけになれば幸甚である。

5.6. おわりに

本研究を立ち上げたきっかけは、研究者である私自身が過去に K 校の生徒として高いレベルの性教育を受けながらも、実際の社会では性にまつわる様々な出来事に対して困難さ、生きづらさとの直面を余儀なくされたためである。例えば女子校では当然のように女性のキャリアや人生設計について学ぶ。一方、性的マイノリティ、とりわけトランスジェンダーにまつわる人生設計については全く情報がない。当時はネットでも情報が乏しく、トランスジェンダーとしての自覚も薄い中で生きる道を探るよりも、自身のマイノリティ性に蓋をして生きる方が遥かに現実的だと考えていたが、卒業後、想像以上にマイノリティをめぐる社会状況は厳しいという現実を知った。本研究では割愛したが、同性婚を始めとする日本の社会制度は遅々として進まず、当事者たちは多大な影響を被っている。私にとって最も身近な例から性的マイノリティに関する話をとりあげたが、とりわけ多くの女性の人生の意思決定や、健康を損なうような法律が多いことも問題であると、国内外から長年批判されている。

そうした日本の現状や自身の過去、そして性教育の講演ボランティアでの経験を振り返り、性について個々の生徒が必要とする内容を多角的に学び、時に相談できる継続的な居場所が必要だと実感した。なぜなら、それによって初めて、性教育で教えられる「正しさ」と「正しくなさ」の間に幾重にも横たわる、現実のレイヤー（層、あるいは段階）を知ることが可能となるからだ。

インターネットが発達した今日においても、若年層にはそうした機会やつながりは非常に貴重だ。授業では時間が限られており、対話というより意見の表明に止まってしまう場合も多い。加えて、性教育はアップデートの速度が早い分野でもある。それは現実社会と切っても切れない関係である以上、仕方のないことだが、裏を返せば授業で教わったことだけが、個人にとって正しいとは言い切れなくなるケースも多いということだ。そういった現実では、自らが学ぶだけではな

く、人との関わり方、対話の仕方というのも非常に重要なものとなってくる。知識を身につけるだけでなく、それらをどのように活用することで命や選択を守れるのか。教科書的な話ではなく、当事者の生きた情報を得るにはどうしたら良いのか。あるいは、それをしなくてはならない状況を強いる社会にどのように抵抗し、交渉し、変えていけば良いのか。

こうした疑問を持つこと、あるいは答えの手がかりを知ること。ピアエドゥケーターや、他の生徒との関わりを持つ中で、自分らしく生きるために必要な考え方や知識、経験を得る。何よりそういったニーズに応じる空間がネットや外部の組織だけではなく、生徒にとって馴染み深い日常であり、かつアクセスへのハードルも低い学校の中にも存在することこそが、重要なのである。

性教育を学ぶかたちに正解はない。多くの学校内におけるセクソロジールームのような取り組みが広がることで包括的性教育の普及の新たな一歩につながることを切に願う。

謝

辞

本研究の主指導教員であり、分かりやすいご指導とともに、研究計画から執筆まで本当に根気強く向き合ってくださいました慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 ITOMA プロジェクトの佐藤千尋准教授に、心より深く感謝申し上げます。並びに研究について、いつも鋭い様々な助言をいただきました慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の大川恵子教授、不足していた視点についてご指摘くださいました武田秀太郎准教授に、深く感謝申し上げます。

参 考 文 献

- [1] 西岡笑子. わが国の性教育の歴史的変遷とリプロダクティブヘルス/ライツ. 日本衛生学雑誌, Vol. 73, No. 2, pp. 178–184, 2018.
- [2] 浅井春夫. わが国の性教育政策の分岐点と包括的性教育の展望: 学習指導要領の問題点と国際スタンダードからの逸脱. まなびあい, Vol. 11, pp. 88–101, 2018.
- [3] Pandora Pound, Rebecca Langford, and Rona Campbell. What do young people think about their school-based sex and relationship education? a qualitative synthesis of young people’s views and experiences. *BMJ open*, Vol. 6, No. 9, p. e011329, 2016.
- [4] Lisa M Cookingham and Ginny L Ryan. The impact of social media on the sexual and social wellness of adolescents. *Journal of pediatric and adolescent gynecology*, Vol. 28, No. 1, pp. 2–5, 2015.
- [5] 久野和子. 子どもの「学び」と「生活」のセーフティネットとしての学校図書館. 図書館界= The library world, Vol. 75, No. 3, p. 187, 2023.
- [6] 久野和子, クノカズコ. フィンランドにおける「第三の場 (サードプレイス)」(third places) としての図書館. 神戸女子大学文学部紀要, Vol. 49, pp. 101–114, 2016.
- [7] Ray Oldenburg. *The Great Good Place*. Paragon House, 1989.
- [8] Brian Arao and Kristi Clemens. From safe spaces to brave spaces: A new way to frame dialogue around diversity and social justice. In *The art of effective*

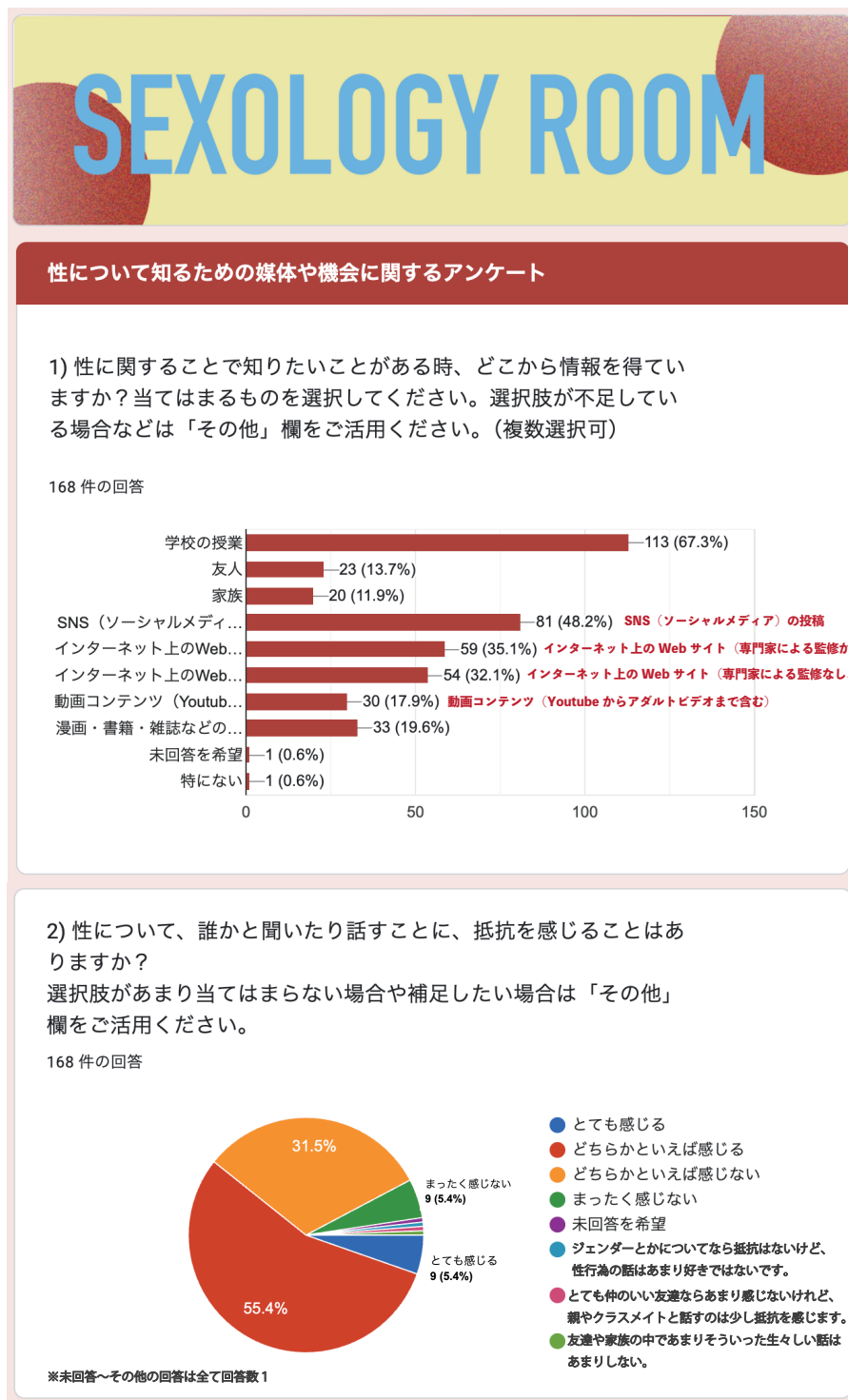
facilitation, pp. 135–150. Routledge, 2023.

- [9] 時山麻美, トキヤマアサミ, 牧野智恵, マキノトモエ. (原著論文) ピアサポートを受けたがん患者の体験. 石川看護雑誌, Vol. 14, pp. 35–45, 2017.
- [10] 坪井真美. 中高生のデート dv 予防教育に関する文献検討 デート dv 予防教育の実施状況および予防教育方法の分析. 帯広大谷短期大学紀要, Vol. 60, pp. 1–8, 2023.
- [11] 渡部基, 野津有司. 我が国の学校における性・エイズ教育のピアエデュケーションプログラム開発の展望—中学生・高校生を対象としたプログラムの比較—. 日本健康教育学会誌, Vol. 13, No. 2, pp. 68–76, 2005.

付 録

付録 A

付録 A：事前アンケートの結果（自由記述を含む）

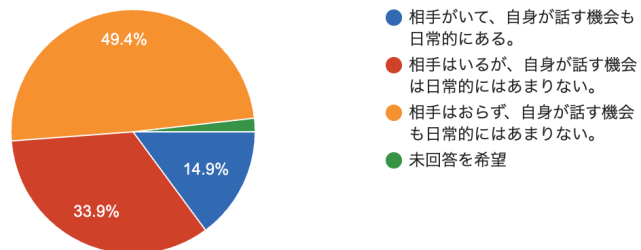


3-1) 性について気軽に話せる相手や、または日常的にそういった機
会はありますか？

選択肢があまり当てはまらない場合や補足したい場合は「その他」
欄をご活用ください。

（対面、オンラインなど形式は問いません。）

168 件の回答



付録 A：事前アンケートの結果（自由記述を含む）

性に関して話す機会や関心のある話題、及びその理由(本人の希望により集計不可の回答を除く)

[illegible]

性に関して話す機会や関心のある話題、及びその理由(本人の希望により集計不可の回答を除く)

[illegible]

性に関して話す機会や関心のある話題、及びその理由(本人の希望により集計不可の回答を除く)

[illegible]

付録 A：事前アンケートの結果（自由記述を含む）

性に関して話す機会や関心のある話題、及びその理由(本人の希望により集計不可の回答を除く)

[illegible]

性に関して話す機会や関心のある話題、及びその理由(本人の希望により集計不可の回答を除く)

[illegible]

性について知りたいこと、または誰かに聞きたい話したいこと(本人の希望により集計不可の回答を除く)

5) 性について知りたいこと、または誰かに聞きたい、話したいことがあれば、こちらの欄にどうぞ。 (悩んでいること、草率に好奇心で知りたいことなど、なんでも書いてもらって大丈夫です。短くても、一言でも構いません。)	
中世的な見た目が好きなのは、ジェンダーに関係あるのでしょうか。	
恋愛に興味がないのですが推しという概念と好きな人という概念はなにが違うんだろうと思います。 友達がみんな彼氏欲しい！というのが理解できなくて困ってます笑	
私たちの世代が働く頃にはどのくらい格差が無くなっているのか	
今のジェンダーバイアスとかは、生物学的な所から始まっているのか	
赤ちゃんが生まれた時に産婦人科の人？が赤ちゃんの性別を見つけた時に性別で判断すると聞いたんですけど、 赤ちゃんの時って、あんまり見た目わかりずらそうだなと思ったんですけど、何を基準に判断しているのか気になりました。	
思春期に自分の性に関するマイノリティな一面を見つけたが、それが成長する過程で消えた場合、その人の本当の性はなんだと思いますか？	
性自認はどのように決まるのか、何を基準に自分の性が確定するのか	
体と心の性別が一致していない気がして悩むことが多々あります。	
日本の性教育が遅れている理由	
対人関係で一番苦労したことは何ですか。	
ホモセクシュアルの方々は好意を持った人がヘテロセクシュアルだったら、どうするのか、どう思うのか、が気になります。	
自分の性自認が割と曖昧で好きになる対象も男女どちらもある状態だが、誰にも打ち明けていない	
性に関して日本と世界とではどのくらいの認識の差があるのか。	
行き過ぎた多様性についてどう考えますか。	
私が友達に向ける感情は執着強めの友情なのか恋なのか	
みんなが「このイケメン！」だったり騒いでいても、その感覚がよくわからない。 顔立ちが整っているのは分かるけど、カッコいいとはならない。	
男装したいというのはジェンダーが関係するんですか。	
全ての女性はバイセクシュアルか、ホモセクシュアルであるという話を聞いたことがあり、私は少し納得しているのですが、実際どうなのが気になります。	
カミングアウトはすべきか	
同性愛について	
ホモセクシュアルだったり、トランスジェンダーだと相手が告白してくれた場合、付き合い方を変えないとは思いますが、 性に関することをはなづらくなると感じてしまいます。こういうことはなるべく無くした方がいいのでしょうか？	

性について知りたいこと、または誰かに聞きたい話したいこと(本人の希望により集計不可の回答を除く)

女子校や男子校で生活を経ける途中で自分の性自認のずれや性的嗜好が変わることがあるのか (吉祥生は)平均何歳くらいでセックスをするのか 恋人とセックスをするのは普通なのか	
セックスとジェンダーが異なるといふ感覚？がよくわからないです。	
女同士でセックスはできるのか	
同学年で性的経験がある人はどれくらい割合いるのか気になる	
失礼だったらごめんなさい！ 女性トイレ等に入るのは抵抗ありますか？ 吉祥生在学時から性別について悩んでいましたか？	
エックスジェンダーの推しがいるのですが調べてみると性的指向等がだいぶ幅広くて分かりませんでした。 人によって異なるのでしょうか。	
進路に迷っているので、性を大学で勉強しようと思った理由が知りたいです。	
特にないです。	
国全体としての性教育が遅れていると思うので進めたい。	
セクマイ当事者には性的話をどこまで踏み込んでいいのかがよく分からないです。 何も考えず話してしまつたら相手は傷ついてしまうかもしれないし、かといって気遣いをしすぎたら相手も申し訳ない気持ちになってしまうのかもしれない。 そこが難しいので是非回答いただければと思います。	
女子校だからこそ、男子と関わる機会が無いのと、少し遠ざけてしまうところがあるので、大学生になったらそれが治るのか不安です。 また、純粋な性格と周りから言われているので、こんなタイプの私が性に興味があることを知られたらまずいと思うて、 最低限のことしか知らないわからないというふりをしています。一方周囲はあんスタなど女性向けのソシャゲを多くやっておき、差を感じます。 私はいわゆる男性向けのソシャゲ(女性キャラが多い)を多くやっています。これは3次元にも影響することなのか。周囲に男性がおらずわかりません。	
性は男性キャラに魅力を感じることはできません。これは3次元にも影響することなのか。周囲に男性がおらずわかりません。	
性行為について詳しく分からないので知りたい。	
性器まわりの脱毛	
旧石器時代とかでもいろいろなジェンダーの人がいたのか知りたい。	
具体的な性行為の手順というかわれなどはどこで知るものなんですか？	

性について知りたいこと、または誰かに聞きたい話したいこと(本人の希望により集計不可の回答を除く)

性別に関してあなたの性自認はなんだと聞かれても上手く答えられなかったり、性的指向を聞かれてもいまいちよく分からないのですが、それはいつしか自認するようになるのでしょうか 心が男、女であるとかよく分からないです。 例えば心が女性であるというところはメイクをしたり、スカートを履きたいと感じたり、男子トイレに入ることには抵抗があるということなのでしょうか？ 心が男性であるというところはどのようなんでしょうか？決定的に自分の性自認は男性だ、女性だというものがなくやんでいます。 孫ジャルさんが自分の性自認を自覚したのはいつですか？またどのようなようにその結論に至りましたか？	今から23年くらい前の話です。私が所属する部活に、AとB(この二人は私の一つ上です)という先輩がいました。AはBのことが嫌いでした。おそらくBもAのことは嫌いでした。Bは、中学部長を決めるときにA選と方針の違いから揉めて退部しました。その約半年後、部活中に私とAの二人で作業していたとき、Aが平然と「Bが急に『実はトランスジェンダーなんだけど』って言ってきた」みたいなこと記憶頼りである故かなり曖昧です)を言ってきました。私は知らなかった(というこのとき言われなかったら知らないままだったはず)のでどんな反応をすればよいのか分かりませんでした。その後、Bは退部していったとはいえ、時々通学路で肩かけるなど私とBの接点は全くなかったわけではありませんでした。私はその度、何を思えばよいのだろうか、今まで通り接するべきだろうか(本来なら私は知らないはずだったから)どんな風に今まで接していたっけ...とか、色々考えていました。私が中三に進級した頃には見かけなくなりましたが、普段この事を考えることは滅多にありません。それでもふと思いついて、今更どうしようもないのにあれこれ考えてしまいモヤモヤすることがあります。私はこのことをどう捉えればよいでしょうか。ちなみに、風の噂によるとBは共学の高校に進学したらしいです。
生理が重い。	
異性のアイドルに対してリア恋になるかならないか	
周りがどう思っているのかとどうかが気になります。	
ずっと人を好きになったことなく、誰かを好きになっても友達を超えることは無さそうだなって思ってます	
共学ではどうやって学んでいるんだろう	
自分よりずっと年下の子が好きっておかしくないと思うんですけど変ですか？	
私は身体は大多数の女性と同じでも、性自認は女性でもなく男性でもない、ひとつの「生命体」であってそれ以上でもそれ以下でもないと思っている。可愛い物は好きだし、でもそれだけで女性、どー括りにされるのには若干違和感がある。 それに、私は部活の一歳年上の先輩に恋をしている(多分。これも確信はない)。そんな人間だしプラスで自閉症で人の感情が分からないところがあるので、私は自虐を込めてマイノリティーの極みと言うことがあった。そんな私が一丁前に恋愛だけして何なのだろうと思うことがある。(これ以上は長くなるので割愛)	
セクマイの人たちはどんなきっかけで自分がマイノリティだと自覚するのか	

付録 B

付録B：事前アンケートの質問項目

性教育に関する研究同意&アンケート



【研究説明書】

研究に参加される前に、必ずこちらの[研究説明書](#)に目を通してください。
研究の詳細や個人情報の取り扱い等について記載しています。

【説明書の概要】

- ・本研究の主な目的
“性を対話する雑談会ワークショップ”（「セクソロジールーム」と呼称）の性教育分野における有効性の検証
- ・調査に同意した場合
数回のアンケート調査、及びワークショップ参加時のデータ収集への協力をお願いしています。
これらは強制ではなく、研究参加後も随時参加を取りやめることが可能です。
- ・個人情報の取り扱いについて
データは全て完全な匿名にて収集し、厳重に扱われます。

詳細は[研究説明書](#)をご参照ください。
（研究説明書の文字をクリックすると当該ページにジャンプします。）

【生徒用】



[研究説明書](#)に目を通し、下記の全ての項目に同意いただける場合のみ、チェックをつけてください。

1. 研究説明書を読み、理解しました。
2. この研究の参加者であることに同意します。
3. 自身の情報が上記の研究目的のために使用されることに同意します。
4. 個人情報は閑プロジェクトの管理の下、最長2028年3月まで保管され、慶應義塾大学プライバシーポリシーに従って取り扱われることを理解しています。
5. 自身の情報の機密性と匿名性が保持され、いかなる研究成果においても個人を特定できないようにして使用されることを理解しています。

☐ 上記の事項に同意します。

【保護者用】



[研究説明書](#)に目を通し、下記の全ての項目に同意いただける場合のみ、チェックをつけてください。

1. 研究説明書を読み、理解しました。
2. この研究の参加者であることに同意します。
3. 自身の情報が上記の研究目的のために使用されることに同意します。
4. 個人情報は閑プロジェクトの管理の下、最長2028年3月まで保管され、慶應義塾大学プライバシーポリシーに従って取り扱われることを理解しています。
5. 自身の情報の機密性と匿名性が保持され、いかなる研究成果においても個人を特定できないようにして使用されることを理解しています。

☐ 上記の事項に同意します。

付録 B：事前アンケートの質問項目

1) 性に関することで知りたいことがある時、どこから情報を得ていますか？当てはまるものを選択してください。選択肢が不足している場合などは「その他」欄をご活用ください。（複数選択可） *

- ☐ 学校の授業
- ☐ 友人
- ☐ 家族
- ☐ SNS（ソーシャルメディア）の投稿
- ☐ インターネット上のWebサイト（専門家による監修が有る）
- ☐ インターネット上のWebサイト（専門家による監修なし、または不明）
- ☐ 動画コンテンツ（Youtubeからアダルトビデオまで含む）
- ☐ 漫画・書籍・雑誌などの出版物
- ☐ 未回答を希望
- ☐ その他...

2) 性について、誰かと聞いたり話すことに、抵抗を感じることはありますか？ *

選択肢があまり当てはまらない場合や補足したい場合は「その他」欄をご活用ください。

- ☐ とても感じる
- ☐ どちらかといえば感じる
- ☐ どちらかといえば感じない
- ☐ まったく感じない
- ☐ 未回答を希望
- ☐ その他...

3-1) 性について気軽に話せる相手や、または日常的にそういった機会はありますか？ *

選択肢があまり当てはまらない場合や補足したい場合は「その他」欄をご活用ください。（対面、オンラインなど形式は問いません。）

- ☐ 相手がいて、自身が話す機会も日常的にある。
- ☐ 相手はいるが、自身が話す機会は日常的にはあまりない。
- ☐ 相手はおらず、自身が話す機会も日常的にはあまりない。
- ☐ 未回答を希望
- ☐ その他...

付録 B：事前アンケートの質問項目

3-2) 可能であれば、上記の選択肢を選んだ理由も教えてください。

長文回答

4-1) 性教育の年間授業カリキュラムの中で、特に気になる内容、テーマなどがありますか？ *
(複数選択可)

- ☐ ①<Let's Study Sexuality>性を学ぶ関係作り、セクシュアリティの概念と探索
- ☐ ②<多様な性の世界>性の多様性と基礎知識、ジェンダーなど
- ☐ ③<リプロダクティブ・ヘルツ・ライツ>セックス/避妊/仕事と妊娠出産/不妊症
- ☐ ④<性の健康と安全>性感染症、AIDS、性暴力、デートDV
- ☐ その他...

4-2) 上記の選択肢を選んだ理由を、①～④の番号も明記した上で教えてください。 *
※その他の場合、番号は⑤と書いてください。

長文回答

5) 性について知りたいこと、または誰かに聞きたい、話したいことがあれば、こちらの欄にどうぞ。(悩んでいること、単純に好奇心で知りたいことなど、なんでも書いてもらって大丈夫です。短くても、一言でも構いません。)

長文回答

6) アンケートでいただいた回答や質問は、完全な匿名状態で収集・管理され、統計データや Q&Aの一部として取り上げる可能性があります。あなたの回答を統計にカウントし、取り上げても問題ないでしょうか。 *
(補足したい場合は「その他」欄をご活用ください。)

- ☐ 取り上げてもOK
- ☐ 取り上げはNG
- ☐ その他...

付録 C

付録 C：参加後アンケート質問項目

参加後アンケート（プチ相談会）

B I U ↺ ✕

【締切：セクソロジールーム参加当日】

この度はワークショップ『セクソロジールーム』へ参加いただき、ありがとうございました。
5分程度で済みますので、アンケートにご協力いただければ幸いです。

また、何か主催者宛に個別で伝えたいことがあれば、sonjaru1204@kmd.keio.ac.jpまでご連絡ください。

1)セクソロジールーム（プチ相談会）に参加した日付を選んでください。*

2) セクソロジールーム（プチ相談会）に参加しようと思った理由について教えてください。*
（無ければ「特になし」と記入してください。）

長文回答

3)セクソロジールーム（プチ相談会）に参加してみた感想を教えてください。（ポジティブなものでなくても、まとまった文章でなくても大丈夫です。）

長文回答

4) 参加中、性をテーマに他者と聞いたり話すことに、抵抗を感じましたか？*

- ☐ 感じた
- ☐ 比較的感じた
- ☐ あまり感じなかった
- ☐ 感じなかった
- ☐ その他（自由記述）

5-1) 会の雰囲気等に関して、自身が感じたものと最も近いものに○をつけてください。*

	良い	そこそこ良い	ふつう	あまり良くない	悪い
入退室のし易さ	☐	☐	☐	☐	☐
居心地	☐	☐	☐	☐	☐
話しやすさ	☐	☐	☐	☐	☐
聞きやすさ	☐	☐	☐	☐	☐

5-2) 上記の項目を選んだ理由を、簡単な内容でも良いので教えてください。*

長文回答

6) その他何か書きたいことがあれば、自由に書いてください。(後から感じた感想、コメント、今後会で取り上げてほしいテーマなど何でも)

長文回答

付録 D

付録D：その他配布物

SEXOLOGY ROOM GROUND RULE

安全のための
グラウンドルール

- ①参加や入退は完全に自由、誰でも歓迎！
参加していて気分が悪くなったなら、無理せず休んだり退出しても大丈夫。
- ②発言する際には、様々な背景を持つ人がいることを想像する。
また、誰かを傷つけたり、安易に決めつけるような発言は控える。
- ③話したくないと思った時は話さなくて OK。
- ④参加者の個人的な経験談が共有された場合、それを本人の許可なく外部に話さない。

★安全な空間作りのために、以上のルールは厳守してください。
★困ったことがあったら、主催者や教員、保護者、相談窓口やホットラインなどに相談を。
★その他、参加にあたって何か調整や事前に知っておいてほしいこと等がある場合はお気軽にお知らせください。

相談窓口・ホットライン一部紹介

【みんなの人権 110 番（法務局）】
差別や虐待、ハラスメントなど、さまざまな人権問題についての相談を受けつけています。
電話：0570-003-110（受付時間：平日 8 時 30 分～17 時 15 分）
ウェブサイト：<https://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken20.html>

【こどもの人権 110 番・LINE じんけん相談（法務局）】
いじめにあって学校に行きたくない、家の人に嫌なことをされる、部活動で暴言・暴力を受けているなど、
なやみがあったら迷わず相談を。
電話：0120-007-110（無料）（受付時間：平日 8 時 30 分～17 時 15 分）
LINE：相談用アカウントあり（受付時間：平日 8 時 30 分～17 時 15 分）
ウェブサイト：<https://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken112.html>

【東京都若者総合相談センター「若ナビαJ」】
若者のさまざまななやみに対応する総合窓口。
社会福祉士や臨床心理士などの有資格者や十分な研修を受けた者が相談員として対応し、秘密は厳守します。
電話：03-3267-0808 ※電話相談専用
（受付時間：月～土曜 11 時～23 時／受付は 22 時 30 分まで／年末年始のぞく）
ウェブサイト：<https://www.wakanavi-tokyo.metro.tokyo.lg.jp/>

【よりそいホットライン】
様々な悩みに寄り添い、一緒に解決する方法を探します。
電話：0120-279-338（24 時間）
FAX：0120-773-776（電話では聴き取りが難しい方はご利用ください）
ウェブサイト：<https://www.since2011.net/yorisoi/>
LGBTQ の方向けのチャットあり：<https://comarigoto.jp/>

【レインボー・ホットライン】
セクシュアル・マイノリティのための電話相談・LINE 相談。
日時：毎月第 1 月曜 19 時～22 時（LINE の受付は 21 時まで）
電話：0120-51-9181

※上記の相談窓口は一例です。ここに挙げた以外にも様々な相談窓口があります。
小さな悩みでも、まとまった話でなくても構いません。抱え込まず、誰かに話してみてください。

図 D.1 配布したグラウンドルール